

山
ご
ら

第38号
平成19年11月
関東氷上郷友会



おもわず新しい

NEXT



人びとが暮らしの中で願っていたことに、それ以上のモノで、最良のカチで応えていきたい。
そして、人びとの「心」を包み、「夢」を装うことができる企業
ネクスタはそういう存在であり続けたいと考えています。

ネクスタ株式会社

東京支店 111-0051 東京都台東区蔵前2-4-5 K-FRONTビル TEL 03-3861-2331

ネクスタ ラッパイ株式会社

東京工場 121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12 TEL 03-3849-6611
千葉工場 270-0202 千葉県野田市関宿台町2192 TEL 04-7196-1721

ネクスタ パッケージ株式会社

栃木工場 323-1104 栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938 TEL 0282-62-3321



山
ざら

第
38
号

高^{たかうじ}氏の爪の跡とや丹波栗

山ざる 第38号 目次

〈表紙〉可部美智子作陶彫「げんかのあと」二〇〇七年作

〈扉・目次写真〉①山南町岩屋・石龕寺参道（俳句〓渡邊隆男）／②③山南町北太田

④柏原厄除祭八幡神社参道（短歌〓若山牧水）……徳田八郎衛・撮影

ふるさと遠望……渡邊隆男 5

平成18年度「ふるさとの会」開催……6／会計報告書……9

寄附者芳名……10／今年の祝寿の方ご紹介……11／懇親会スナップ……12

△ふるさと随想▽

丹波竜の化石発見に寄せて……野村節三 16

豆で山鳩を釣る……大槻作治郎 19

夏曆・お宮さんの蟬……原谷洋美 20

霧深い幽玄の里・小谷……細見次郎 22

ふる里は悲しみを秘めて……木村つた江 24

丹波を運んでくれた俳句……木呂子恵美子 27

帰郷のたびの柏原散歩道……谷 敬三 28

△回想・エッセイ▽

フランスのおじさん……田中正邦 32

わが青春の「尚志館」……植田茂樹 35

悩ましきは「靴下の穴」……小竹政孝 37

商社マン人生……稲岡俊一 40

我が部隊終戦始末記……小田武次郎 43

《丹波通信》 丹波へ「ターナー」者呼び込もう……萩野祐一 47

《丹波を撮る》……撮影・徳田八郎衛 50

《近況・エッセイ》

恐竜の化石と博物館活動……岩槻邦男 56

夏の日の出来事……尾崎美代子 59

セルビアの技術指導について……酒井重男 60

極楽とんぼ……大島信子 62

かくも愛しき存在・Ⅱ……岡田昌子 64

還暦すぎて古稀に……徳義通夫 66

故郷の空が教えてくれた……東野恵子 68

わが定年後のサードライフ……直田 正 70

息子の転勤に思う……今田二三夫 72

折々の記(4)……井本義一 74

《丹波研究》 丹波市古代の夢路の旅……日置孝彦 84

《旅行記》 トルコ感動の旅……足立東一郎 86

ドレスデンの思い出……生田清弘 89

《ふるさとトピックス―丹波新聞から―》……95・107/《BOOKS》……96

《会員だより》……100/《インフォメーション》……104

協賛広告……108/編集後記……120

白鳥は哀かなしからずや
空の青海のあまにも
染まらずたゞふ

牧水

ふるさと遠望

会長 渡邊隆男



山南町上滝の篠山川畔から恐竜の化石が出ました。

一億数千年前という年数で思えば、別にふしぎな事件ではありません。床几に寝そべって夜空を眺め、星の光が何億光年とかというトテツもなく遠い宇宙の果てから来た煌めきと聞き感動したことを思い出します。

ところがその悠久の天地に住む人類の持ち時間はせいぜいが百年、我々はそのいわば束の間の、しかも繰り返すことのない人生を生きているのです。そうならば私たちは好きなこと善いことだけに関わって、嫌なことや悪いことはみな忘れてしまいたいものです。

私たちがいつの日にか来し方の記憶を手操るとき、山紫水明のあの山里が、なぜか幼いころの背景で蘇え

ります。畳なわる山並の柔らかな稜線が、彩鮮やかな四季の移ろいのなかに水墨画のごとく浮かぶのです。

私の知る世界一美しい四季の里、それは丹波です。ヒーフミーヨーイームーナナヤココノツトー。

お年寄りのあの数え方もトンと聞けなくなりました。

ゴメンナーと大声で格子戸を潜ったものです。「お越しー、おまはんどこのボンやったいネー」やさしいお婆ちゃんが駄菓子を半紙に包んでくれたものです。

「よう精せいが出よりまんナ」「へーまあボチボチー」

「それまた何を植えよんなはんの」「ニンニクだす、うちの人に食べてもろて頑張ってもらわんとネーエ」

「まあよーいーなはる、あんな元氣しとってやのに、ようでけたらうちにもチーと分けてほしいわー」

上方言葉に古い方言、侍、公家言葉までが複雑に入り混じっていて、丹波言葉の源流が日本古来の文化に深く根ざしていることがわかります。丹波言葉は豊富な敬語や謙讓語を駆使しながら老若男女長幼の序を峻別し、語尾に絶妙な抑揚を配して自在な情感をまで表すという、元来洗練を極めた格調高い言葉なのです。

日本で一番人情の深い里、そらむろん丹波でっせ。



平成十八年度の「ふるさとの会」は十一月十八日、東京都千代田区の九段会館において催され、なごやかな雰囲気のうち、総会・祝寿会・懇親会が滞りなく執り行われた。

総会は渡邊隆男会長のあいさつのあと、坂上理事の司会で議事にうつり、第一号議案として役員全員の任期満了にともなう改選が諮られ、全会一致で新役員および役員会構成案が承認された。新役員は本年度総会の日から、平成二十年度の総会の日まで二年間の会務に従事していただくことになる。新役員一覧は別記のとおり。



祝寿の花束を受けられる若森敏郎さん

つづいて谷口浩章理事より会計報告、足立和巳監事より監査報告、坂上勝朗理事より会務報告があり、いずれも全会の承認を得た。

祝寿会では、今年満八十歳をお迎える郷友に、会長から祝辞と花束をお

贈りすることになっている。本年は六名のかたがたにご案内をさしあげたが、ご出席は若森敏郎様おひとり。若森さんは長くODAの仕事で、発展途上国のインフラ整備に尽力されてきた。八十歳のこんにちも現役で社会とのかかわりを持っておられる。

懇親会は、本年も丹波市長・辻重五郎氏をお迎えすることができ、日に日に移り変わる丹波の実情をおうかがいした。兵庫県からは西田裕東京事務所所長のご出席を得、祝辞と県政の近況報告および成功裏に終了した「のじぎく国体」への募金協力に関して、謝辞をいただいた。井戸敏三知事からも祝レタックスを頂戴した。

常岡副会長の乾杯の発声で宴会に入る。それまで神妙だった会場は、堰を切ったようなにぎやかさに包まれる。毎回のことながら三時間がまたたく間に過ぎ去る。締めは、吉住自由造さんと近藤田治さんにおねがいした。吉住さんは大正五年、近藤さんは大正二年のお生まれで、毎年きょうの日にみなさんに会えるのを楽しみにされているとのこと。滋味あふれるご両人のお話を、全員静まりかえって拝聴。帰り際になにか一

つ得をしたような気分になった。

おみやげは、本年も山の芋（二キログラム）と本年度産丹波黒大豆（一・八リットル）各十本。抽選で福をお持ち帰りいただいた。山の芋はJAたんばから、黒大豆は篠山の小田垣商店からそれぞれの当選者に後日直接配送した。（文責・坂上勝朗）

●平成十八年度「ふるさとの会」出席者

（順不同・敬称略）

〈来賓〉

辻重五郎 丹波市長

上野克幸 丹波市秘書広報係長

西田 裕 兵庫県東京事務所長

上村治三 同課長

本田冴子 関西丹波郷友会理事

〈祝寿〉

若森敏郎

〈会員〉

○青垣町（2名）

足立和巳 足立静雄

○市島町（9名）

芦田重秋 荒木輝雄 木村つた江 高見秀史

鶴田ゆき子 藤田 純 藤田 徹 丸川健三郎

丸川宥次郎

○柏原町（7名）

生田清弘 小田晋作 可部美智子 木下正勝

谷 敬三 常岡幹彦 山本明男

○春日町（3名）

木呂子恵美子 近藤田治 吉住自由造

○山南町（13名）

植木十和子 梅田重二 大野義昭 梶原矢寸子

久保春雄 勢川武彦 仲 一聡 仲 正

中居篤子 原谷洋美 藤原ひさ子 増井 攻

渡邊貴美子

○氷上町（15名）

足立謙悟 足立吉雄 安達健一郎 上田道代

上野重喜 臼井小五郎 大石佐代子 岸本 勲

坂上勝朗 祐安夏江 谷口 捷 谷口浩章

仲矢美恵 本城英明 渡邊隆男

●改選役員（平成十八年十一月十八日改選／敬称略）

〈会長〉 渡邊隆男

〈副会長〉 岡 吉明 岸本 勲 坂上勝朗 谷口浩章

鶴田ゆき子

〈顧問〉 荻野 武 木村つた江 常岡幹彦 村上末吉

〈常任理事〉 足立謙悟 足立静雄 足立吉雄 池田 忍

上 高子 上田道代 植田茂樹 岡田昌子

木呂子恵美子 勢川武彦 高見秀史 谷敬三

徳田八郎衛 中居篤子 仲 一聡 原谷洋美

藤田 徹 本城英明

〈理事〉（*は新任） 朝倉成樹 芦田重秋 足立和孝

足立和巳 足立勲平 足立知佳子 井徳正吾

*上田正文 *上野重喜 大野善三 小田富士夫

金出一郎 久保良雄 直田 正 高見嘉都司

千種倫幸 藤田 純 藤原ひさ子 前田武彦

増井 攻 丸川宥次郎 吉住自由造

吉田勇司

〈監事〉 臼井小五郎 岡林逸郎

〈退任〉 梶原 清（顧問） 片岡クミ子（理事）

勢 正彦（同） 谷垣悦夫（同）

会 計 報 告 書

(平成18年7月1日～平成19年6月30日)

関東水上郷友会

会計理事・谷口 浩章

原谷 洋美

(単位：円)


収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	2,187,388	郵便貯金	出 版 費	785,611	『山ざる』37号
		1,387,388円	通信・印刷費	103,685	総会・役員会案内等
		定額貯金 800,000円			
振替貯金 0円					
年会費収入	383,000	延 169名	総 会 費	444,530	総会関係支払
総会費収入	320,000	46名	会 議 費	151,620	役員会等
役員会費収入	176,000	延 50名	支払手数料	17,410	振替手数料 17,410円
編集会費収入	0				送金手数料 0円
寄 付 金	186,254	延 42名	消耗・備品費	92,963	事務用品等
広告料収入	747,000	延 62名	繰 越 金	2,404,427	郵便貯金
そ の 他	604	利子等			1,604,427円
					定額貯金 800,000円
			振替貯金 0円		
合 計	4,000,246		合 計	4,000,246	

監査の結果、上記の通り相違ありません。

平成19年7月23日

会計監査

岡林 浩章 

谷井 小五郎 

●寄附者芳名

高見 秀史殿	高見嘉都司殿	上田 正文殿	生田 清弘殿	足立 吉雄殿	中村 允也殿	谷口 浩章殿	谷口 捷殿	上野 重喜殿	塚口 智殿	近藤 一義殿	村上 末吉殿	堀井 隆川殿	中居 篤子殿	堂本和 三郎殿	氷上ブルフ会殿	考える会殿 (関西丹波市郷友会)	本田 牙子殿	西田裕・上村治三殿 (兵庫東京事務所)	辻 重五郎殿 (丹波市長)
三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	八〇〇〇円	八〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	一四、二〇〇円	二一、〇五四円	七、〇〇〇円	一〇、〇〇〇円	一〇、〇〇〇円

原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られております。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。



- テーマ：①ふるさと随想
 ②近況エッセイ
 ③会員日より（短信）
 ④催し（個展・同窓会など）
 ⑤丹波を撮る（写真）など

締切日：原稿はいつでも受け付けております。次号の最終締切りは平成20年8月20日です。

原稿枚数：400字詰4～5枚程度
 送付先：〒247-0005 横浜市栄区 桂町1-1-1-101
 (株)ホンゴ出版内
 『山ざる』編集部
 TEL 045-895-2712
 FAX 045-895-4338

Eメール hongo@mocha.ocn.ne.jp

■ワープロで打たれた方は複写のフロッピーをお送りください。

榎本 康子殿	植田 茂樹殿	稲岡 俊一殿	荒木 輝雄殿	山口 泰男殿	山口 敏之殿	山口 和久殿	村上 久夫殿	藤田 純殿	樋口ふみ子殿	谷垣 尚殿
一〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	二〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円
千葉 淳子殿	塩見みつゑ殿	笹倉 郁子殿	小糸 イキ殿	吉住自由造殿	本城 英明殿	常岡 幹彦殿	鈴木 和栄殿	坂上 勝朗殿	木呂子恵美子殿	大地富美子殿
五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円

今年の祝寿の方ご紹介

足立かをる様

- ① 生年月日
- ② ご出身地
- ③ 上京の年月日
- ④ 上京の動機
- ⑤ これまでに最も印象に残ることは
- ⑥ 祝寿を迎えられてひと言

- ① 昭和2年1月28日
- ② 春日町
- ③ 昭和26年4月1日
- ④ 結婚のため
- ⑤ 国鉄時代より日本列島一周は私の夢でしたが、JRになりフルムーンのおかげで主人と本州、四国、九州を一周し、北海道も3度行けたことが一



- 番大切な思い出です。そして旧黒田庄村喜多に生まれ、女学校は黒井より柏原へ通学（戦時中）、また戦後は黒井に暮らして昭和26年、結婚により上京、豊島区要町へ。横浜に引っ越して30年、童謡の会に入会して20年程になり、あちこちで「ふるさと」を唄うたびに幼き日の黒田庄村喜多の景色が思い出されます。古き良き美しい里、「上月」のご先祖は喜多に多い。
- ⑥ 今年1月末80歳を迎え、とに

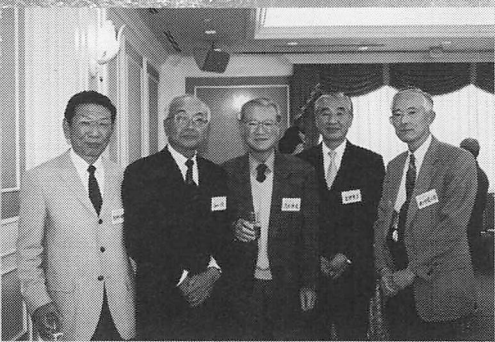
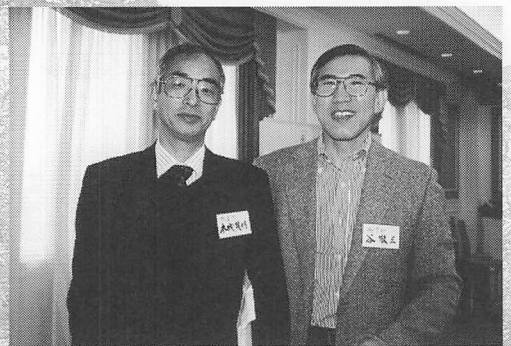
高見嘉都司様

かく病気もせず、健やかに明るく楽しく充実した日々を過ごせてこられたことは本当に有難く感謝に尽きます。ご先祖様や皆様のおかげです。天寿を全うするまで、健やかに、ピンピンコロリのPPKです。

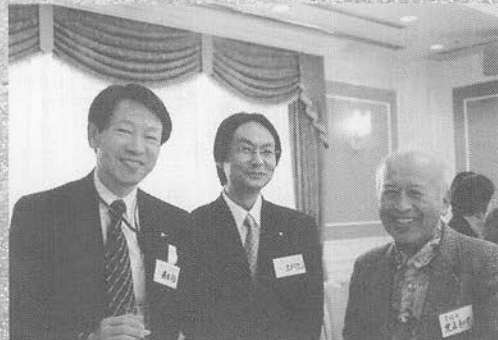
- ① 昭和2年7月29日
- ② 市島町市島
- ③ 昭和19年4月3日
- ④ 進学のため
- ⑤ 食料難、下宿難、空襲下の東京、そして終戦後の東京と、全てが夢のような時代でした。
- ⑥ あっという間の人生、まだまだこれから生涯現役で頑張りたいと思います。

懇親会 スナップ









ふるさと随想

丹波竜の化石発見に寄せて

野村 節 三（山南町）



早いもので、二十三年間の東京・横浜生活のあと、この岩手県三陸（気仙地方）へ移住して三十一年、当地を「終の住処」と決め、すっかり気仙人になりきって今年の正月三日、私はのんびりNHKテレビを見ていた。

突然、「兵庫県で恐竜の化石発見」というニュースが飛び込んできた。驚いて画面に吸いつけられたが、発見場所は篠山市と丹波市との境辺りか、また、三田市にも関係があるような報道で詳細が判らなかつた。

関東水上新聞の皆さんも御存知のこととは思いますが、翌日の朝日新聞（平19・1・4）の記事によると、昨年八月、篠山・丹波両市にまたがる「篠山層群」という白亜紀前期（約一億四千万〜一億二千万年前）の泥

岩層から、地元の地学愛好家二人によって、大型草食恐竜の肋骨などの化石と別の肉食恐竜の歯の化石が発見され、その後、兵庫県立人と自然の博物館（三田市）による試掘でもいくつかの草食恐竜の化石が見つかったとのこと。

この草食恐竜は骨の形から体長十数メートル以上の竜脚類の「ティタノサウルス」の可能性が高く、国内では十一年前に三重県鳥羽市で発見された「鳥羽竜」と並ぶか、それを凌ぐかも知れない大発見であるという。発見者は村上茂氏と足立冽氏^{きよし}で、今後も発掘作業が行なわれる予定で、同博物館の三枝春生^{はるお}研究員によると、もし、全身化石が出れば世界的に貴重な資料になるといふ。この記事に私はまた驚いたが、知りたい発掘現場は保存のため、その時点では明らかにされなかった。

ところが、その後、空中撮影のテレビ映像を見ていてまたまた驚いた。何とその映像の中に一瞬、川の脇に見覚えの小さな発電所らしきものがあつたのである。つまり、問題の発掘現場はよく知っている旧上久下村上滝（現丹波市山南町上滝）の篠山川沿いにある古び

た旧村営水力発電所下の岩場であつた。

私は昭和二十年代の柏原中学・高校時代に、しばしば旧久下村岡本の自宅から自転車で行く旧上久下村阿草にある親戚の家へ行った。その県道途中に道路を横切つて布設されていた太い水道管と福知山線の線路越しに見えるしよしゃな赤レンガの旧発電所は今も印象に残っている。郷里を離れてからも、帰省時には車窓から篠山川とこの発電所を眺めて懐かしく思ったものがある。

§

このような赤レンガの建物は、今では現丹波市内でも極めて希少で、以前からは非保存する価値があり、活用する方策はないものかと思つていた。ところが、大正十一年に完成したこの発電所については、既に村上彰氏（元小学校長・水上郡教育長）が本誌（第二十二号、平成三年）に「村営発電所に再び命を」と題して寄稿（写真入り）しておられた。「あの発電所跡は人に夢を与える貴重な資源だ」という当時の神戸新聞論説委員長の言葉や「七十年前、自力で村営発電所を作り上げた先輩たちの夢と積極性に学ぶことだ」と思

う」という村上氏の見解に私も全面的に賛同したい。

それから十五年、奇しくもその旧発電所下の川筋で大型草食恐竜の化石が発見されたのである。

国内での恐竜や魚竜の化石は東北地方、特に三陸沿岸などでもいくつかが発見されている。宮城県旧柳津町（現登米市津山町）から出た首長竜の先祖「稲井竜」、同県旧志津川町（現南三陸町）から出た魚竜「志津川竜」、福島県いわき市で発見された首長竜の新種「双葉鈴木竜」、宮城県旧歌津町（現南三陸町）から出た魚竜「歌津魚竜」、岩手県岩泉町茂師^もで発見された竜脚類の「茂師竜」である（発見順）。

§

この「茂師竜」と今回発見された草食恐竜も同じ竜脚類で、丹波と三陸との繋がりに恐竜も関係があったことに、ある種の因縁を感じている。

そのほか肉食恐竜としては、群馬県神流町の恐竜をはじめ、富山・石川・福井・岐阜県にまたがる白亜紀前期の手取層群から出た「加賀竜」などや熊本県御船町^{みふね}から出た「御船竜」などがあるという。

今回、山南町で発見された恐竜は「丹波竜」と命名

され、六月には竜脚類では初めての頭骨の一部（脳窓）が発見されて、大阪で開催された日本古生物学会での発表など、益々、全身骨格発掘の夢が膨らんできた。

また、地元では恐竜シンポジウムも開かれて、まちづくりの起爆剤にしよう^とと計画されている由。

第二次調査は川の水量が減る冬季に行われるのとこのと。

そこで、発掘場所にあるあの赤レンガの旧発電所をその歴史を伝えると共に「恐竜資料館」にしてはと提案したい。そうすれば大正時代の発電所の建物の保存と恐竜発見の記念の一石二鳥で、まちづくりの拠点になるのではなからうか。

地元^にに既にある「上久下悠遊塾クラブ」（塾長・村上彰氏）で、この件を御検討されれば幸いである。

「丹波竜」発掘調査の更なる御進展と丹波市の益々の御発展を遙か岩手三陸より祈りつつ稿を終える。

豆で山鳩を釣る

大 槻 作治郎 (市島町)

終戦前、小学校一年生の頃である。我が家の下に桑の木畑があった。冬になり小鳥の餌が無くなってくと、この桑の木に山鳩が寄って来る。我が家の食べ物を狙っているらしい。この山鳩は丸々と太り、とてもおいしそうである。それに雀より何倍も大きい。山鳩は雀と違ってなかなか捕れない。人間よりも賢いところがある。でも、どうしても捕って食べたかった。

当時、田舎では肉はなかなか食べられなかった。肉は年に数回、家で飼っている雄鶏か卵を産まなくなった鶏を、お祭りなどお祝いごとの日にかしわにし、すき焼きにして食べるだけである。このときの母のすき焼きの味が今も忘れられない。特に卵の赤ちゃんがたくさん付いた卵袋のところは、子供らが取り合いっこして食べた。最近肉売り場で、この卵袋をほとんど見かけなくなつた。

さて、どうしてこの賢い山鳩を捕るか子供心に考えた。鳩は豆が好きである。豆を餌にどうすればよいかが思いつかない。何しろ桑の木の上で捕らえなくてはならない。

はっと気が付いた。鯉釣り針で鳩を釣ってやろう。今は亡き兄に相談し、兄が鯉釣り仕掛けの針に、水に漬けて柔らかくした豆2、3個を刺し、鳩釣りの仕掛けを作った。勿論、糸は強力なものにした。この仕掛けを兄が夕方薄暗くなつてから数箇所、桑の木の高い所に取り付けた。

翌朝早く起き、下の桑畑を見た。なんと一羽山鳩が引っかかっている。すぐ兄に報告し、ここで山鳩を逃がしては一大事と、慎重に仕掛けを外してもらった。この日、僕のアイデアで山鳩が捕れ、大いばりであった。兄が羽をむしり取り、母がかしわにした。肉は細かく刻んで、皆が食べられるように鳩肉ご飯にした。肉のついた骨、頭、足は、しょう油をかけて焼き、残さず食べた。その味が今も舌に残っている。その後、桑の木に鳩釣り仕掛けを何回しても、山鳩は二度とからなかった。

夏曆・お宮さんの蟬

原 谷 洋 美（山南町）

東京に住んで三十年。蟬の鳴き初めが丹波に較べて遅いと思っていたが、近年とみに遅くなった気がする。今年など、杉並の我が家近くでは、梅雨明け前の七月二十九日に「あれは、ひよっとすると蟬の声？」と耳を澄ませたくらいである。梅雨明けと同時に、夏の風物詩「油蟬の蟬しぐれ」が夏の到来を告げ、プールの歓声が響きはじめて……と、秩序ある夏の訪れを今か今かと待っていると、間近で一際高く「ミンミンミンミー」とミンミン蟬の声が聞こえてきて、一足飛びに夏本番になってしまふ慌ただしさである。

丹波の実家は山南町下滝のお宮さんの脇。夏というにはまだ早い頃、柿の木や桜の木に、保護色の小さなニイニイ蟬が細く可愛く鳴き始め、梅雨明け前にはもはや油蟬の最盛期。夏休みの早朝ラジオ体操の後や雨上がりのお宮さんでは「ガト（蟬の幼虫をこう呼んで

いた）」をギザギザの付いた小さな穴から釣り上げることに一喜一憂し、夜には、蚊帳に留まらせてワクワクしながら羽化させた。

朝露と共に、またすくと陽が陰る夕方には、ヒゲラシがさわやかな冷気を与えてくれた。蜩のことを「帷子蟬」とも呼ぶと、祖母に教えてもらった記憶もある。真昼のミンミン蟬は午睡の子守歌。夏の盛りには「シャーンシャーン」と、くま蟬が暑さを謳歌して、嫌が上にも盛夏の熱気を覚えたものである。甲子園の高校野球が佳境になる頃、ツクツク法師が澄んだ声を響かせはじめると、夏の逝く淋しさと、夏休みの終わってしまふ焦りにつつまれる。お宮さんの蟬は、夏の曆そのものであった。

十八年前、主人の転勤で移り住んだ四日市の杜宅のベランダ際に、大きな桜の樹があった。夏の初めから蟬しぐれが辺りを震わせ、ここはやはり関西圏だと嬉しくなったものである。当時、十歳と七歳だった娘達は、蚊帳ならぬカーテンに留まらせた幼虫（ガト）が刻々と脱皮する様子に、息を詰めて感動していた。下の娘が、夏休みの宿題に描いた羽化の絵に「ぐんぐん

ぐん伸びた」と添えた文が、未だに忘れられない。

なによりも驚かされたのは、東京生まれ育ちの主人が、蟬の羽化の華麗なドラマを見たことがないと、子供達よりも熱心に集中していたことである。都会育ち・田舎育ち、それぞれの環境でそれぞれ得ることも多かったと思うが、この時ばかりは、田舎育ちの方が、うーんと得をしていると思った。

丹波の夏暦の日々の、初々しい感動を忘れたくないと熱望するこの頃である。

○透く羽に力蓄へつつ蟬は真闇の中に鎮もりてをり

○透き通るうす青緑に羽は伸ぶ蟬は大地のちから震はせ

○抜け殻に身じろぎもせずぶら下がり朝の光に輝く
蟬は

○一夜の闇を支配してゐし一匹の蟬とび立てりいのち繋ぎに

○抜け殻がほとりと落つる門の脇真一文字に朝来た
りけり

○透明の薄茶の空蟬しつけ糸切りたるやうに白き筋
あり

○両の掌にあふるるばかり抜け殻を集め撒きゐる闇
を撒きゐる

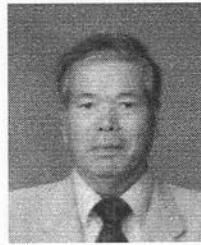
○夜更けて聴く蟬の声 秋虫もふいと混ぢりてなほ
生々し

○思ひ切りシャワー浴おれば耳奥に蟬の声聴く幾重
にも聴く

○ふるさとより北の東京八月の半ばを過ぎて降る蟬
しぐれ

霧深い幽玄の里・小谷

細見次郎（氷上町）



山に囲まれた小さな里、小谷が私の生まれ育った在所である。子供のころは「小谷小村庵寺寄せて十三軒」と言われたもので、鴨内や沼、東芦田村と比べて、小さく山を背にしてこじんまり

纏まった村である。

父、子、孫の三世代が同居する家で、厳格な祖父がいることで家の中の空気が緊張してくるのを感じながら少年時代を送った。終戦のあとの緊張した時代で、みな生きるのに必死だった。鋼線のように固い筋肉質で体ができた、男達の里で米をつくる姿や山仕事から帰ってくる姿をよく見かけた。山の向こうがどうなっているか知らないまま、先祖の田畑を耕すだけで一生を終えた人がいたかも知れない。

単調な農村の生活になにか楽しみと趣向を凝らして、細見和司先生の肝煎りで運動会が行われたことがあった。会場はお宮さんの境内、天にそびえる大杉やお堂のまわりでよく遊んだところで、球入れ、借りもの競走、パン食い競走などが行われた。みんなよく笑って楽しかった。

庵寺は、足立さん宅の横を通って急な坂道を一町ほど登ると蒼古とした石段があり、そこを上がりきった所にあった。庫裡もあって、家族が住んでいたことがある。その家族が去ってから寂しくなったが、月並会には腰の曲がった老婆が孫に手を引かれてお参りした。釈迦仏が御開帳されたときは、高い木塔やのぼりが立ち、近郊山村からも大勢の参詣者が訪れ、賑やかだった。花御堂をつくり誕生仏に甘茶をそそぐ准仏会、甘茶をいただく口の中にさつと甘みが広がったことを覚えていた。

よく手入れされた山の土壌は、たっぶり水を含んだスポンジのように機能する。山から落ちる水は谷を縫って川になり村のまん中を流れる。水は煌めいていた。豊かな水で大根を洗ったり、乳のみ子を抱えた女はお

しめを洗ったりする風景があつた。少し下つた所に地藏菩薩があつて、お盆になると地藏さまに赤い涎掛けを着せ、夏野菜を供えた。大人たちは床几をかりて涼をとり、まわりで子供は花火に興じる。夏の暑さを忘れるひと時だつた。

夏休みの一番の楽しみは佐治川の水泳である。今と違つて水量は豊かで、水深二メートルの深いところもあつた。水中メガネをつけて潜ると、竹の根の影から出てくる大きなフナと目が合つて興奮したものである。佐治川の堤防には深い竹藪があつて、中に入ると太い竹が林立し、竹の根が地面を盛り上げるように繁殖していた。竹の皮がたくさん落ちていて、拾つて帰ると買いくる人がきて、小遣い銭になつた。

上級生は俊敏でついていけず、下級生の谷口昇君を相手にしてよく遊んだ。もつと遊びたいが牛の世話がある、牛の草刈りや牛飼いはもつぱら子供の仕事と決まっていた。もちろん、丹波牛は農作業の動力源であり、ペコを生むと経済が潤うことになり、大事な家畜である。

しかし、子供ごろにはやつかない生き物であつて、

牛の存在は疎ましかつた。この思いを実行した人がいて、牛の尻に草刈り鎌を打ち込んだ。結末を知らないが、親にひどく叱られたことだろう。

田植えが始まると休校になり、どこの子も田植えの列に並ばされた。足に吸い付く蛭を払いながら、一本ずつ手で植える作業はつらかつた。田植え機の発明は機械化文明の中で最も貢献したものと思う。

あの頃は、漆黒の闇というものがあつて、夜空の星は明るかつた。暗闇の一隅を照らす蛍の光で物の輪郭が分かつた。夜道を歩きながら頭上の星空が樹木によつて切り取られるのを見上げつつ、次に踏み出す足の位置を決めるといふ経験をしたものである。

朝霧が山に沿つて立ち昇つてゆき、山峡の空気がしつとり湿り、空がうす暗くなる。山鳥の鳴き声がキーンと響く以外に何の音もしない静寂の景観は幻のようだ。こういう景色の中にいると妙に落ち着くのである。



ふる里は悲しみを秘めて：

木村 つた江（市島町）

平成十九年（二〇〇七）八月

十三日は、私の九十一回目の誕生日なのです。今一人で朝食をとりながら、自分の五歳の誕生日のことを思い出しております。



この日、私の箱お膳の上には大きな鯛のお頭付きに、具のいっぱい入ったのり巻き。茶碗蒸し、紅白のかまぼこ、野菜の煮物。そして半紙に包まれた石に紅白の水引きが掛かったのが載っていました。私はその石を見て母に尋ねました。

「石なんか食べられへんのに、何でお膳に乗っとるんかいなあ」

と母が、

「それはなあ、石のように堅い強い人になるようにゆうて、昔からそうゆう慣わしなんやで」

「ふうん」

とよく分からないまま、私は誕生日のご馳走が何より嬉しかったことを、ついこの間の出来事のように頭に浮かべていました。鯛のお頭付きはおしもんと言って米の粉に色づけして作ったらくがんの菓子です。丹波では生魚はなかなか手に入らないので、お祝い事にはよくこのおしもん菓子が使われていました。

#

私は、昭和六年に単身上京しました。その頃は、娘一人の東京行きは大冒険でした。祖母は、生き別れになるかも知れんと言って泣きました。父は大反対、でも私の決心が堅いことを知っていた母は、父を説得してくれ、私の東京行きは叶えられたのです。

振り返ってみて、私が今日までの七十五年間に東京と丹波を往復したのは何回か、ざっと計算してみました。

昭和六年から同十二年までに三回、十七年から三十二年までに五回、この五回の内訳には、二十年五月、太平洋戦争で、夫の出征、その一週間後に杉並の自宅焼失。私は幼児二人を連れて実家に疎開しました。夫は

十月に復員して建築製材業を始めましたが、三年で失敗し、その後も次々と事業を始めたのですが失敗し、夫婦間の確執で、私は心身共に疲れ果て、丹波まで母の顔を見に帰ったのです。そして一泊すると元氣を取り戻したことも二、三回ありました。

その母も三十年に七十歳で他界しました。それから約十年間は、生活に追われて一度も帰郷しておりません。

昭和三十九年（一九六四）、私達一家は調布市に移転しました。この年十月に東海道新幹線が開通し、それからは毎年一、二回は帰郷しました。合計四十六回になります。私が何故このようにふる里に思いを寄せていたかと言えば、五人姉妹のうち三人が近隣に嫁ぎ、それぞれ一家の主婦として元氣に暮らしていました。その上、実家を継いでいるのが二番目の姉でしたから、母が健在のように思われたからです。

#

昭和五十八年に私の夫が急逝して、私の独り暮らしが始まってからも、年に二回は帰郷していました。五人姉妹が実家に集い、夜の更けるのも忘れて昔語り

耽ったものです。

平成十二年に長姉と兄が死亡しました。長姉は、三十一歳で戦争未亡人となり、再婚もせず農家を守り、義父母を看取り、三人の遺児を立派に育て上げ、八十五歳で他界しました。兄も日中戦争で召集され、南方の戦場に駆り出されましたが、無事復員し、神戸で事業を経営し、八十三歳で死亡しました。

平成十六年（二〇〇四）一月下旬、丹波市柏原の末妹が亡くなったことを妹の長男からの電話で知りました。突然のことなので間違いいはないかと我が耳を疑いました。前年の秋、私は妹の家に五泊して、妹の友達数人と会食したり、おしゃべりをして楽しい一日を過ごしたのですから。あんなに元氣だったのに、どうして……。

長男の話によると、妹は自分の病気のことは誰にも知らせるなど言っていたとか。暮れに入院してから一ヶ月足らずで亡くなるなんて。病名は大腸ガンの末期だったとか。私はそれ以後、すっかり落ち込んでしまいました。夫が亡くなった時より悲しみが深かったのですから……。

妹は、私より十一歳も若い七十七歳でした。妹が亡くなる二年前には、実家の姉と、もう一人の妹（末妹の姉）とが同じ年に他界していて、五人姉妹のうち、二人だけになっていましたので、いっそう身に滲みて悲しく、身体の一部をもぎ取られたようでした。

三人の姉妹は、子供達がみな都会に出て生活しているため、それぞれ独り暮らしで家を守っていたのですが、家はみな空き家になってしまいました。

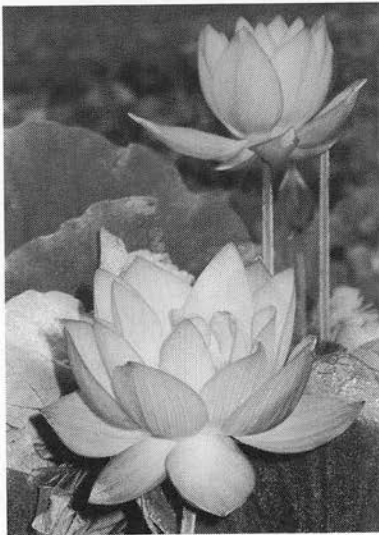
私の実家は、六百年も続いた豪族だったとかで、お墓や仏壇にもそれを窺わせるものがあります。唯、家系図が焼失してしまっているのが残念です。昔は家系図は財産の一部だったとか。父の所に最初に嫁いできた女性が、半年で離縁されたので、その腹いせに持ち去り、或る寺に預けたが、その後その寺が焼失してしまっただけで、ここまでは姉が調べたのですが……。

#

平成十八年（二〇〇六）、実家の姉の次男（後継者）が六十三歳で他界したのです。その妻の話によると、次男はあちこちに借金があり、その返済のために実家を売却しなければならぬとのこと、私の悲しみは更

に深まりました。

私は、長生きとはめでたいのだろうかと、つくづく考えさせられました。これから私は、年齢に相応しい日々の努力を積み重ねつつ、自分のことは自分でして、静かに終焉を迎えたいと精進している今日この頃でございます。



丹波を運んでくれた俳句うた

木呂子 恵美子（春日町）

今年一月二十日のこと、突然中学、高校とずっと一緒だった、須原みどりさん（旧姓、能勢）から電話があり、春日部中学校の稲畑先生が、NHK俳句大会で全国五万人から選ばれ、明日テレビ出演されるとのこと。朝七時半からなのでビデオを撮った。NHKホールで開催された平成十八年度NHK全国俳句大会である。会場の雛段ひなだんに、特選句に選ばれた人達が選者の先生方と並んで座っておられた。

自由題、題詠部門とあり、題詠「波」で、
「熱爛あつたぬの一言波紋ひとことほもん 起こしけり」 稲畑介廣

説明に、「寄り合いでのこと、『うちの主人は優しい』の一言に、集まった皆が反応、夫婦談義は止まるところを知りません」とあった。何か微笑ましい丹波の寄り合いの様子が感じられ、お祝いの手紙を出したら、先生の返信を頂いた。中に「須原みどりさんと同じく

席を並べて市島町OB大学の俳句教室で、七十八歳の手習いというのが現状ですので驚くほかありませんでした。須原さんはセンスのある句を作りますので、教室の優等生です」とあった。昔から、みどりさんは、私とか向かいの竹内さんが、「みちこちゃん」「えみちゃん」と呼び合う中で、「みどりさん」と皆から一目おかれているお姉さまで、未だに暖かく優しい人柄で皆の面倒を見てくれる大切なお友達である。

春日部中学校時代といえば、私はまだ十四歳の頃、五十五年前だから稲畑先生はまだ二十三、四歳の新任教師で居られたのだ。丹波は俳句、短歌の上手な人が多いと思う。以前、私が担当していた「ふるさとの民話と伝説」で一番最初に書いて下さった「澄すまずの池」の和田猛たけし先生も春日部時代の恩師である。

丹波新聞で多利公民館の歌会で名前を見かけたり、兄弟姉妹の絵や書の会も開いておられるようだ。先生が十四歳の私を描いて下さった油絵が、今も私の手元にある。母が縫った紺と白のホームスパンの碁盤ごばんじま縞の上衣が面白いということだったと思う。丹波からの便りが春日部時代のなつかしい昔を運んでくれた。

帰郷のたびの柏原散歩道

谷 敬 三（柏原町）

私の実家は柏原町の街中にある。今も兄家族が書籍業を営んでいて、年に一〜二度、柏原に帰るが、先祖

の墓参りを含め市内の散歩を楽しむにしている。ここでは、記憶の詰まった約二時間の散歩の行程をご紹介します。お付き合い下さい。

実家を出て丹波新聞社の脇を通り小道を抜けると、下町の町外れの山の際に実家の菩提寺「日満山本覚寺」がある。墓参りを済ませた後は同寺の境内にある叔父・丸山哲郎の句碑を訪れ、叔父が故郷丹波に寄せた思いを共有することにする。

青丹波 栗も榛も 總を垂れ



叔父 丸山哲郎の句碑



下町から西山を望む

叔父は宝塚で元気に暮らしているが、時々もらう手紙の文章が理解できず、難解な漢字がよく知っている碩学は今も健在である。

お寺の坂道を下る途中で、西山が真正面に目に入ってくる。町内を隈なく歩き廻ることを日課としていた祖父が、柏原には夕日が奇麗な場所が7か所ある、との印象を父親に語っていたという。生前元気だった頃



五社稲荷神社の鳥居



八幡神社の鳥居

の父親が、何とかその七か所を見つけ出したいと念じていたが、間違いないく、この坂から見る西山の夕日はその一つであろう。見事である。父は生前に七か所を探せたのであろうか。

高谷公園に向かう。その側には、捨女公園がある。高谷公園の桜は素晴らしいが、最近では春に柏原を訪れ

る機会が少なく、この桜を見ることが出来ないのが残念である。公園の入口に共同の水汲み場があったが、上下水道が整った今も利用されているであろうか。

高谷公園を後に山際の道を歩いて行くと、五社稲荷神社（通称・五社はん）がある。ここから八幡山へ連なるあたりは、散歩のハイライトである。鳥居をくぐると、直ぐ左に変形のひょうたん

池があり、昔から亀が住んでいる。今冬訪れた時にも亀が泳いでいるのを見かけたが、子供の頃の五十年前のあの亀なのか。一〇〇段近くもある石段を登りきると、古くて朽ちたような神輿が置かれていた。八幡山に比べて、こちらは保存が行き届いていないのが気になるところである。

五社はんの先の石段を更に登り、千種宮司の家の前を通り抜けると、そのまま八幡山へ続く近道となる。子供の頃は、このあたり一帯が近



柏原高校と大楠



柏陵会館（元・女学校）

所の子供たちの遊び場であり、木や竹で棲家を作り縄張りを張っていた。八幡山については特に紹介の必要もないが、毎年二月の厄除祭りは三丹一のお祭りとして二日間で五万人近くが集まってくる。柏原の商家にとっては年に一度のかき入れ時なので、店の手伝いが忙しく、あまりお祭りを楽しんだ記憶がない。今も当

時の賑やかさは変わらないのであろうか。

高校を卒業し、仙台で学生生活を送ることになったとき、柏原を離れる前日に、祖父が、苦しいときは八幡山の方角に向かってお祈りしろ、と教えてくれた。八幡山にはそうした神様が棲んでおられると信じている。本殿に参り、鐘をつきながら家族の安全を祈願した

後は、奥村川沿いに柏原高校へ向う。懐かしい母校の正門に入る。

記憶が尽きることは無いが、当時の木造校舎は既に無く、今も残っているのは、門扉、体育館、プール、大楠と運動場のみ。自分が授業を受けた教室が無いのは寂しいものだが、それでも我が母校の大楠は迎えてくれる。一世の話も伺った。掲示板から、運動や学術活動が昔よりも活発に行われているのが窺え嬉しい。

柏原高校から崇広小学校へ向かう左側に柏陵会館がある。明治中



織田藩長屋門（崇広小学校）

期の洋風建築で元々は女学校だった気品ある木造の校舎が残っている。

小学校の時に書道とそろばん塾として通っていた思い出がある。当時は二階に畳部屋があり、高校の合宿の宿泊にも利用されていた。塾の合い間に覗きに行くと、甲子園に出場した憧れの野球部のヒーロー達がか

宿を張って
いて胸をときめ
かせたことが
ある。

柏原中学に
入学する直前
の2月に中学
校の校舎が焼
失し、中学生
は全員が崇広
小学校と柏陵
会館を教室と
して間借りす
ることになっ

た。中学入学後の一年間に使わせて頂いた教室が柏陵会館の一階の奥にあるが、小・中・高校でお世話になった唯一の現存する教室となってしまった。

こうした懐かしさの極めつけ、崇広小学校の長屋門をくぐる。織田藩は小名のためお城が無いが、藩屋敷は保存されている。こうした武家屋敷がその後も学校として利用されているのは珍しく、当時は職員室や保健室として使われていた。今は貴重な資料館となっている。あの老松はもう無いが、裏山に長い滑り台が残されており、田捨女や二宮金次郎の顔も昔と変わらな

い。
小学校からは大手筋を通り古市場を抜けると散歩は終わるのだが、地元の石田部落の大歳神社に立ち寄ることにする。野口雨情の柏原小唄に詠まれている太鼓やぐらがある。江戸時代には時報や災害の警報として利用されていたらしいが、石田の集会所となっているので、昔から子供の遊び場であった。

「町の真ん中 櫓の上で つつじ太鼓が昼寝する」



回想・エッセイ

フランスのおじさん

田中正邦（氷上町）

ロマンから、彼の父親が臨終を迎えているとの報せを受けたのは今年の三月十九日のことだった。驚きはしたが、さほど悲しむということはなかった。むしろロマンと彼の両親との生活がただただ懐かしく思い出されるばかりだった。ロマンは私が一九七六年から一九七七年にかけて十ヶ月ほどパリでホームステイをしていた家の息子で、当時は父親と母親の三人暮らしだった。フランス語が話せるようになるにはホームステイがいいと聞いていたので、ある斡旋機関に依頼したところ、この家族を紹介された。

ホームステイ初日は誰もが緊張する。姉夫婦が暮らしていたブリュッセルから列車でパリに着いたのは夏の終わり頃だった。日照り騒ぎのあった年で、とにかくまだ暑かった。インターホンで十階の左側だと「しっかりと」聞きエレベータに乗った。フランスではアパ

ルトマンには表札がないので右側か左側かという情報は重要なのだ。迎えてくれたのはおばさん―フランス風に言うともダム―で、一方的に喋られて、言っていることが全て理解出来ていた訳ではなかったけれど、こちらから話かけなくてもよかったので気楽といえは気楽だった。部屋はアコーデオンカーテンで仕切られた片側のスペースだった。別の片側をロマンが使っていた。完全な個室ではなかったために、彼と言葉を交わす機会も自然と多くなりフランス語の上達に役立ったように思える。

そうこうするうちにロマンが大学から帰ってきて、二言三言挨拶を交わした。ロマンはその頃はハンサムだった。おじさんと初めて顔を合わせたのは夕食時だった。長身で姿勢正しく、ガウンを着てパイプをくゆらし、いかにも家長らしく威厳のある雰囲気を漂わせていたのをよく覚えている。少し近寄り難い―その時は本当にそう思った―雰囲気だった。

この一家の住まいが十六区というパリでも屈指の高級住宅街にあったこと、旧貴族でド・ソリュエーという名前の伯爵だったこと、ブルゴーニュ地方にシャトー

(城館)を所有していること、ロマンがおじさんとおばさんに対して尊称のヴー(あなた)を使っていること、日本人を受け入れたのは私が二度目で、最初の日本人は皇室につながる女性だったこと、おじさんとおばさんが知り合ったのは仏領アルジェリアで、独立戦争の末期、命からがらフランス本土に戻ってきたこと、それから立派そうに見えたおじさんが、微笑ましいほどおばさんの言いなりになっていること、などを知るにはさほど時間はかからなかった。

この一家との暮らしから得たものは、今から考えると途方もなく重要で貴重だったように思える。私がフランス語教師になった起点はこの一家との出会いにあることは間違いない。おじさん、おばさんにはフランスの礼儀作法から、家具の様式まで本場にいろんなことを教えてもらった。私を通していたソルボンヌ大学の文明講座よりも有益だった。週末にはシャトーに連れて行ってもらい庭園の樹木の説明を聞いたり、クリスマスには、田舎の凍えるような教会で真夜中のミサ―カトリック教徒ではなかったけれど―にも参列した。

ロマンはというと一九八一年の夏に日本に来て、氷



リュルシー・ル・ブールの城館の庭園

上町田中の実家で数日間を過ごしている。この町に来た最初のフランス人かも知れないよと彼に言ったらすごく感激していた。浴衣を着せたり、すき焼を生卵一これはつらいらしいーにつけて食べさせたり、日本酒を飲ませたり、畳に布団を敷いて寝せたりと、お決まりの日本体験をしてもらった。そうした甲斐があつて

か今では大の日本びいきになっている。

おじさんが認知症にかかっていることは数年前から知ってはいたが、ロマンから八十八歳の高齢だしあまり長くはないかもしれないから、一度会いに来たほうがいいと言

われたのは去年の夏休み前だった。長女のジュネーヴ大学への留学の手伝いもあったので九月にフランスに会いに行くことにした。パリからロマンの車で田舎のシャトーに向かった。おばさんは相も変わらず元氣一杯だったが、おじさんという以前の堂々とした雰囲気は微塵も見られず、すっかり変わり果ててしまっていた。ロマンが「マサが来たよ」と言うと、おじさんは三十年前と全く同じ声、同じ口調で「マサ」、「マサ」と連呼し始めた。嬉しくもあり悲しくもある瞬間だった。おじさんが亡くなったのはその半年後、ロマンからの報せの数時間後のことだった。

最後にちょっと宣伝。リュルシー・ル・ブールの城館には、おばさんが精魂込めて手入れをしている十八世紀のフランス式庭園があります。ブルゴーニュ地方の名園の一つに指定されており週末には一般公開されています。入場料は五ユーロで、おばさんの熱烈ガイド付きです。最寄り駅はパリから列車で二時間ほどのヌヴェールで三十キロほど離れています。日本人来園者は大歓迎することです。

わが青春の「尚志館」

植田 茂 樹（柏原町）

二〇〇七年三月、神戸新聞に「学生寮、存廢の岐路。東京の兵庫・尚志館定員割れ」という記事が載った。かつては地方出身学生に大人気の学生寮も、設備の古さや二人部屋が敬遠され、存続が危ぶまれているらしい。この記事を読んで、「尚志館、お前も時代の流れには逆らえないのか」と、三十数年前のほろ苦い青春の思い出がよみがえってきた。

尚志館とは、東京都渋谷区代々木にある学生寮で、首都圏の大学に通う兵庫県出身学生のために、社団法人「兵庫県育才会」が運営している。一八七五年、旧篠山藩主青山さんが郷里の師弟を自邸に住ませたのが始まりで、当初は旧多紀郡出身者に限定していたが、代々木に現在の尚志館の建物が完成して以降は対象を全県下に拡げている。約五〇人の学生が生活可能で、最寄り駅が小田急線参宮橋と交通の便が良く、高級住

宅街の一角にあるため入寮希望者が殺到した時代もあった。

さて、一九七二年（昭和四七年）三月、私は尚志館に入寮した。当時の尚志館は二年制で、東京生活に不安を抱いている兵庫出身学生にとっては、二年間でも同郷の者と食事付きの寮生活ができることは何となく安心感があった。尚志館の入寮式で出身校を確認すると、最も多かったのが灘高で、東大の駒場キャンパスに歩いていけるのが人気の理由と聞き、なるほど思った。続いて篠山鳳鳴高、柏原高の順であった。また入寮式に青山さんが出席され、東京の青山という地名は青山家に由来することを知った。

尚志館入寮式の夜、珍しく東京に春の雪が降った。突然、館内アナウンスで屋上に集まれとのこと。何事かと屋上に行くと、新入寮生は正座しろと先輩が叫んでいる。しぶしぶ正座すると、先輩の一人が「尚志館はアパートではない。寮である。寮には寮のルールがある。これから毎日、麻雀の遊び方と酒の飲み方を教えてやる」と宣告された。雪が舞い落ちるなか、私の東京生活が始まった。尚志館では実は麻雀が禁止され

ていた。しかし、そんなことはお構いなしに新入寮生一人一人に先生役の先輩がついて、麻雀のルールや点数の数え方を教えてくれた。

麻雀は大抵徹夜になり、朝ベッドにもぐりこんで寝ると、夕日が沈む頃目が覚める。夕食を食べたらまた麻雀が始まる。阿佐田哲也著の『麻雀放浪記』を読みながら、私は授業のサボリ方を覚えた。ある日、麻雀をしていて夜の十二時になった。当時、NHKテレビでは、夜十二時になると画面に日の丸が映り、君が代が流れた。一緒に麻雀をやっていた寮生が突然「ちよつと待ってくれ」と、日の丸の画面に向かって立ち上がり、三〇秒間最敬礼した。我々も手を止め、その儀式が終わるのを待った。その寮生は、ある宗教団体に所属しており、私は参加はしなかったが「宗教」というものの存在を知った。

入寮時、私はほとんど酒が飲めなかった。しかし、尚志館では毎日どこかで飲み会が開かれ、時事問題や人生・恋愛について白熱した議論が繰り返されていた。尚志館は不思議な空間で、学生運動が激しい時代だったにもかかわらず、寮の中は平和地帯であった。しか

し、新宿駅で暴動があった時は別だった。寮生が竹輪や海産物の干物等を次から次へと持ち帰ってきた。もう時効だから言うが、新宿駅の暴動の際に北海道の物産売り場が壊され、商品が散乱していたらしい。それを寮生が拾ってきたのだという。その夜の寮の飲み会には、するめや竹輪の香りが充満していたのは言うまでもない。私は尚志館で酒が有効なコミュニケーションの手段であることを覚えた。

当時は学生アルバイト情報の入手手段が限られており、寮生が持ち込んでくる情報は貴重であった。新設医大の建築現場でコンクリートの塗り方を覚え、某デパートの社員食堂では野菜サラダの作り方を覚えた。実家からの仕送りにアルバイト代を加えても尚志館の生活に余裕はなかったが、実家より丹波の物産が詰まったダンボール箱が届いた時はうれしかった。その箱を開ける度に、日頃のだらしのない生活への自省の念と、両親への感謝の念が沸き起こったのを覚えている。

尚志館に暮らしていると、関西弁のアクセントは全く抜けなかった。「君は関西出身？」と聞かれるのが嫌で、何とか標準語を話そうとしたが無駄だった。関

西弁を話すことを恥ずかしく思う半面、尚志館という寮でつながった兵庫県の連帯感には心地よいものであった。

尚志館の二年間はあっという間に過ぎ去り、私は少しずつ東京の生活の中で「自立」していった。尚志館は私の青春の原点であった。

悩ましきは「靴下の穴」

小竹 政 孝（柏原町）

靴下。いつも気が抜けない、悩ましきもの。

この私、靴下では、ホントーに恥ずかしくて、やたら切なくて、悔しくてしょうがない経験は何度かした。

その一つ。私が四十二、三の頃。当時、某社某部の次長。まあバリバリまではいかなくても、バリくらの次長ではあったろうか。ある夜、お世話になっている客先の中堅幹部をご接待することになった。接待場所は、割に広い、わが社の敷地内接待施設。部屋は和室。お客さんご到着の三〇分前に、会場の設営状況を検分とて部屋に行った。

靴を脱ぐ。「ウワッ」、靴下に穴があいている。憎たらしくも、右足の親指が「どうだっ」と言わんばかりに顔を出している。「参ったなあ。今から替えの靴下を買いに行く暇はない。誰かに買いに走ってもらっても間に合わないッ」。ズドーンと真つ暗な穴に蹴落とされたようで、寒気がする。もう一人の自分が、「どうすんの！ どうすんだ？」とヤイヤイせかす。

「あっそうだっ。ここは会社だっ！」。私は我が執務室をめぐって走った、走った。「良かったあ」、たった一人部下がいた。残業している。ハアハアハア、ダッダッダ。

「おい、門前君。お前、靴下脱げっ。俺に貸せっ。今から萩の間で△△商事さんのご接待だ。畜生っ、靴下に穴があいてんだよ。濟まんけど、君のを貸してくれッ」と一気にかぶせた。

入社したての頃、ちょっとツツパリ風だった門前君。どう出るか？一瞬ギョツとしたようだったが「ハイッ」。スルスルと靴下を脱いで寄越した。礼を言ったか言わぬか思ひ出せない。その場で、穴のあいた我が靴下を脱ぎ捨て、今や救いの神となった門前君の靴下に替え、急いで部屋に戻った。お客さんはまだお見えになっていない。ああ、助かった。

こんなことを部下に命じる上司もそうはいないであろう。また、とんでもない「命令」に素直に従ってくられた門前君のような、気の好い奴もそうはいまい。その夜の出来事は、何度も何度も語り聞かせた女房ともども、一生忘れ得ぬ思い出となっている。

#

ほかにもある。我がグループ各社の〇〇部門担当部長忘年会。J R川崎駅ビル内、小料理屋の和室。入り口で、「アッ」だ。しかし、その日は、定刻ちようどの到着。万事休すだ。すぐさま靴下を脱ぎ捨て、素足になった。師走の素足だ。杯を酌み交わす度に、「裸足で失礼します。靴下に穴がねえ」を何度言ったことか。そして、わずか二時間あまりの宴会が、なんと長

く感じられたことか。

ぎりぎりセーフの時も何度かあった。少し親指の部分が薄くなっており、指の肌色がうっすらと透けて見えていような時だ。それまでの学習効果で、このよなこともあろうかと、会場内のトイレでまず靴下を点検。当の部分を爪先方向に二センチほど引つ張る。すると、指先がユルユルになる。つまり、靴下が爪先に密着しないように浮かせるのだ。そして、あとは、指先が靴の内壁にできるだけ当たらないよう、ソロソロ、シズシズと会場へ向かうのだ。

しかし、いつも無防備で、何度も同じ失敗を繰り返していたのでは、己の馬鹿さ加減に自己嫌悪に陥る。「備えあれば憂いなし」。もう何年も前から、宴会のある日、あるいは、そろそろ誰からともなく（私から？ともなく、仲間からともなく）「飲もうぜ」と声がかかりそうな日。このような時は替えの靴下をカバンに入れておくのだ。これは間違いない。

もう一つ。古新聞も一緒に持っているときよい。今まではいていた靴下がまだ捨てるほどでもないようなら、それを古新聞何枚かにくるんで持って帰るのだ。靴の

中で汗を吸わされた靴下、たとえ消臭していても、無臭という訳にはいかない。

#

思ひ出話のついでに、靴下に早く穴があきやすい条件を整理しておこう。いささかでも、人様の役に立てば幸いだ。靴下に穴があきやすい条件。

その一、靴下が上等な物であること（ウール百パーセントや、ウール混紡は早くすり減る。繊維が切れやすい）。

その二、靴の中で足先が前後に動き、爪先が靴の内壁に当ることが多いこと（靴が不適合）。

その三、爪の手入れが行き届いていないこと（伸びた爪、割れた爪、尖がった爪など靴下の大敵）。

その四、靴下が濡れていること（激しい雨の時など、靴の中まで濡れることがあるが、特にウール物は濡れていると弱い。私が穴をあけたのも、圧倒的に雨降りが多い）。

その五、走っていて、急にストップをかけ、爪先（靴下先端部）にすごい力を加えること（これは特に要注意。階段の駆け下りも穴あけの確率が高い）。

などだが、これらの条件が重なり合ったりすると、たった一日で新品に穴をあけてしまうことだってある。用心、用心。

#

別の話になるが、私は、雨が降るか降らないかを出掛けに気にするのが大嫌いだ。よって、かさ低くて、軽い々々折り畳み傘を年中カバンに入れて持ち歩いている。今は、他家へ嫁いだ娘がくれた、ペンケースのような、厚さ二センチほどの袋に入る、折り畳み傘を愛用している。傘の常時携帯！　なんと、精神が安らぐことか。なら、いっそ、靴下もカバンに常備しようかな……。



商社マン人生

稲岡 俊 一（柏原町・市島町）

亡き父が国鉄で転勤が多かったため丹後の宮津で生まれた後、小学三年に柏原の崇広小学校へ転入し卒業。中学一年で但馬の八鹿中学に転校、三年生から丹波竹田の竹山中学校に転入し卒業。高校は幸いにも柏原高校卒業（一九六三年）まで居ることが出来ました。

大学は大阪外国語大学（現在の大阪大学外国語学部）に入り、卒業後、伊藤忠商事に入社。通常の海外出張の他に通算十二年弱の海外駐在を経験しました。

一九七一年に数ヶ月間インドネシアのスマトラ島メダンで初めての海外勤務。赴任途中に滞在したシンガポールは、今のようになんて平坦な街ではなく森が沢山あり緑濃く情緒的でした。メダンでは事業の立ち上げが仕事で広大なパイナップル農園、ゴムの樹林をぬけオランウータンの声が聞こえるジャングル近くの現場まで毎日のように車で通いました。

一九七二年から四年強、マダガスカルのタナナリブに駐在。伊藤忠初代の駐在員だったため、全くゼロからスタート。事務所開設手続き、現地スタッフの採用、営業活動等、目のまわるような忙しさでした。総合商社の日本人一人店ですから繊維・機械・金属・食料・物資・化学品・エネルギー・建設の全部門をみることにあります。時には大統領、大臣とも面談しました。

空港から市街まで水田が続いており、人々もポリネシア系が多いので、まるでアジアの田園風景そのものです。休日は日本大使館や他商社の連中と家族ぐるみでゴルフ（芝がうまく育たずフェアウェイは地肌が露出しグリーンはサンドでしたが立派なクラブハウス有り）、マージャン、ドライブ（原色の花が咲き誇る美しい自然がいっぱい）などを楽しみました。ビジネス・バカンスでモリリシャス島、南アフリカのヨハネスブルグ・ケープタウン、ケニアのナイロビ（特にキリマンジャロの麓のサファリーが最高）、さらにはロンドン・パリ・ローマ・マドリッド・アテネ等々にも買い出しを兼ねて行きました。

ただひとつ残念だったのは内戦が勃発したこと。我

が家は戦闘の一番激しい場所に位置していたため、昼夜を問わず約1ヶ月間死ぬほど恐い思いをしました。他には羽仁進映画監督が撮影で来られた時に、娘の未央ちゃんをわが家に二週間お預かりしたこと、作家の阿川弘之・北杜夫氏と大使公邸で食事を共にしたことなどが思い出されます。

一九八三年から三年間、エチオピアのアジスアベバに駐在。今思えば大学生の頃、琵琶湖国際馬拉ソンで「はだしのアベベ」の勇姿を目の前で見たときから紅い糸でエチオピアと結ばれていたようです。その頃の当国は旱魃による大被害を蒙り、国連を中心に世界から援助物資が届けられていました。日本からも安倍晋太郎外務大臣（当時）が訪問され、私も日本人会副会長をしていた関係で大使公邸でお目にかかりました。長島茂雄元巨人軍監督も文化人活動をされていた頃で現地でお会いしました。本来の商社マンの職務に加え日本人会会長・日本人子弟補習学校校長として日本人ご家族皆さんの安全と教育面で寄与させていただきました。

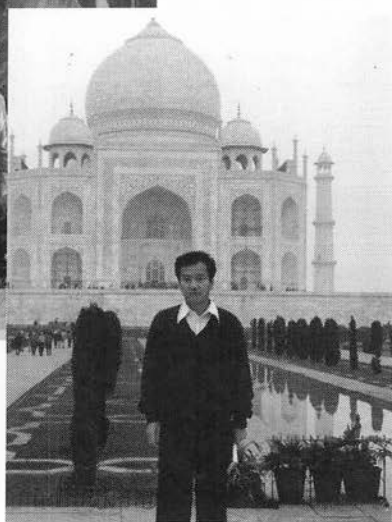
休日はゴルフ場こそありませんでしたが、ソフトボー

ル、ボーリング、マージャン等。ソフトボールは日本青年海外協力隊員を中心に編成したチームで、相手はアメリカ海兵隊或いはキューバ兵士のチームです。野球王国キューバ兵の打球の速さは恐いほどでした。ボーリングは大使ご夫妻をはじめ日本人家族で月一回ささやかな賞品を用意して賑やかにプレーしました。ヨーロッパへの拠点フランクフルトから行ったライン下り、モンブランやユングフラウの雪山観光が素晴らしかったです。隣りのジブチに出張した時、紅海に沈む真っ赤な夕日をながめて、その美しさに感動しひとり涙したことも忘れられない思い出のひとつです。

一九八九年から四年間、インドのニューデリーに駐在。インドが今、破竹の勢いで経済成長を遂げていますが、インド人は非常に頭脳明晰です。私も難しい宇宙・情報分野で現地スタッフに随分助けてもらいました。広くて大きなインドですが、仕事を通じボンベイ・カルカッタ・マドラス・バンガロール等々の主要な都市を見ることができました。またインドの副首相と面談する機会がありましたが、彼の大豪邸に度肝をぬかれたことも忘れられません。



(写真上) 伊藤忠ニューデリー店の現地社員
とパーティで。手前右側が筆者。
(写真右) タージ・マハルを背景に。



デリーには在留邦人の数が多いので、運動会・ソフトボール大会・カラオケ大会等、本格的規模でおこなわれます。運動会は日本人学校の立派なグラウンド、カラオケ大会は照明・音響効果付き一流ホテルの大ホールが会場です。私は最優秀歌唱賞を受賞したり、司会をつとめたりしました。勿論ゴルフ場も街中と郊外に複数あります。実社会にはカースト制度が残存しており、職業階級が細かく分かれていて、我が家にもコック・屋内掃除・洗濯アイロン係・庭掃除・門番の五人がいました。

バカンスはシンガポール・バンコク・香港などを基点にしてオーストラリア・バリ島・ブーケット島などへ足をのびしました。

隣国ブータンも担当していたことから数回行く機会がありました。国全体が自然そのもので、何の汚れもない神聖な山岳国です。おいしい松茸が採れ土産に買って帰ったことが思い出されます。

結果的に十二年弱かけてインド洋のまわりを一周した訳ですが、どの駐在地も住めば都。とても刺激的で内容の濃い毎日でした。

私の趣味は作詩で二十歳代の頃は同人誌に作品を発表しレコードになったこともあり。しかし、その後海外駐在があつたり、日常に追われて長らく中断していましたが、定年を前に再開したところ、国立山梨大学の学生歌（校歌に相当）を作詞することが出来ま

我が部隊終戦始末記

小 田 武次郎（春日町）

何か一筆書け——編集者からの突然の注文である。今回は戦時中の軍隊の話でも書いて責めを果たしたいと思う。ずいぶん昔のことだ。半世紀前のことだから記憶違いもあろうし、事実誤認もあろう。そこらあたりはご容赦願うとして筆を進める。

いきなり血生臭い、しかもおぞましい事件で申し訳ないが、真正正銘、小生の目の前で起きた出来事である。我慢して一読されたい。贖罪の意味もある。

した。その他にも入賞作品有り。

現在は伊藤忠商事の関連会社で仕事をさせて貰っています。休日は熱海のリゾートマンションへ行き、ゆっくりと温泉につかるのを楽しみに過ごしております。

◆朝鮮人を斬る

舞台は釜山（プーサン）。当時、小生はほやほやの陸軍中尉。所属部隊は釜山高射砲連隊の前戦中隊、敗戦のショック覚めやらぬ真つ只中だった。ムシヤクシヤ気分を抑え切れない。気分転換には酒と女に限るとばかり、同僚の中尉を誘って釜山の街中に繰り出した。

ところで、敗戦とともに軍隊の武装解除は断行され、山の中腹にあった高射砲陣地は米軍に撤収、われわれは丸腰のまま付近の村落に追いやられた。しかし、将校だけはなぜか帯刀を許された。刀を持った将校に付いて行けば身は安全と計算づくの下士官、兵達が同行を求めてきた。日頃、刀身に打ち粉をして大切にしていた軍刀を腰にした私は、得意気にこれを許した。稚

氣愛すべし。

一行は街の一角にあるカフェバーに到着。そこは十数人の客でいっぱいになる小じんまりとした広さ。われわれ兵隊のほか一般の民間人（朝鮮人）も交え、ウイスキーの水割りで相当盛り上がった。その中の酔っぱらいの一人が聞こえよがしに「あいつら大きなツラをしているな、あんな軍刀でオレが斬れるもんか。負け犬のくせに」とケンカを売ってきた。

突然、私の隣りにいた友人が立ち上がり「このヤロー、もう一度言ってみろ、負け犬とは何だ、オレを侮辱したな」と怒声一番相手に詰め寄り、軍刀の鞘を払って斬りつけた。

相手の首の付け根あたりに業物が食い込んだ。普段はおとなしい彼の顔面は真っ赤である。首のあたりから噴出する鮮血で、あたり一面は血の海。返り血を浴びた女の悲鳴、みな総立ち、あとは修羅場である。こちらも身の危険を感じて酒場を脱出、どうにか事なきを得た。酔いなどいっぺんに吹き飛んでしまっていた。

一方、友人はその足で連隊本部に直行、「たった今、この軍刀で朝鮮人を切り捨てました」と連隊長に事件

のてんまつを報告、軍首脳部の裁決を待った。

敗戦のドサクサ状態とはいえ、白昼、敗戦国の軍人が戦勝国（？）の民間人を切り捨てる。こんな言語道断の不法かつ不当行為が許されようはずがない。でもそれが通ったのである。彼は建て前優先の軍隊の中で自己を貫き、事件後も悠然と軍務を続けていたし、軍の具体的な処置も聞かれないまま、一切は闇の中。彼が今生きていたらどんな感慨を持っただろうか？

敗戦時のゴタゴタ、不始末は数多い。これもまたその一つに過ぎない。

◆中隊長の涙

敗戦で部隊は武装解除させられ、陣地の外に放り出されるまでの短期間、部隊は陣地内の兵舎にいた。隊内は相当荒れていたが、大部分の兵隊は帰国準備に大忙し、手製のリュックサックをつくり、生米はもとより、軍靴、軍服、軍衣（シャツ）、袴下（ズボン下）、毛布、敷布など目ぼしい官物はもとより、上靴（スリッパ）も飯盒も箸もスプーンもミノもクソも、ありとあらゆる物をリュックに放り込んでいた。たちまち大き

な荷物が三つも四つも出来上がる。それを背中に負い、両手に持ち、胸に抱えて釜山港に待機している船まで運ぶためである。この船は米軍が仕立て釜山港から九州の博多までわれわれを運んでくれることになっていた。到着後はわが軍隊は現地解散となる。敗戦でヨレヨレになった兵隊たち、颯爽たるアメリカ兵に比べ、何ともはや哀れで乞食にも似た集団と言えようか。

ところで、荷物作りに懸命のわれわれを横目で冷ややかに見つめる一群があった。朝鮮で現地徴兵になっている朝鮮の人達である。部隊の三分の一は彼らだ。彼らは勤勉で有能かつまじめだったが、兵舎で居住を共にしながらも、虎視眈々と脱走の機会を狙っていた。脱走に成功すれば周囲は同じ朝鮮の仲間。絶対に日本の軍隊には見つからないのだ。

こうした空気を察知したわれわれ部隊も、夜の不寝番、班、小隊単位で警戒を強めた。だが、効果は薄く、水の漏れるように夜ごと兵は消えていく。彼らにすれば祖国に帰れるのだから当然のことだろう。しかし、こうした空気とは裏腹に所属の部隊に対し、現状を嘆き、隊の解散までを円満に終わらせたいと訴える者も

いるにはいたが、それもどうか？

現状に吹っ切れたのが、好人物の召集中隊長である。中隊長はある日、隊の兵たちを舎前に集め訓示をたれ始めた。「こんな状態では居ても立ってもいられない。オレの立場も考えてくれ、どうかおとなしくしてもらいたい。このままでは面子丸つぶれだ」。何と途中で両目に涙を浮かべながら言ったものだ。中隊長のこの言葉は、自己の立場しか考えない妄言に等しい。これには私もあきれ返った。

「隊長がそんなことを言うとかケンにかかわる」と一言抗弁すると、途端に鉄拳が当方に飛んできた。以来、中隊長には小生も一線を画するようになった。

人間は大事な時にこそ、その本質が現われるというが、彼もまた弱きふつうの人間に過ぎなかつたのだから。

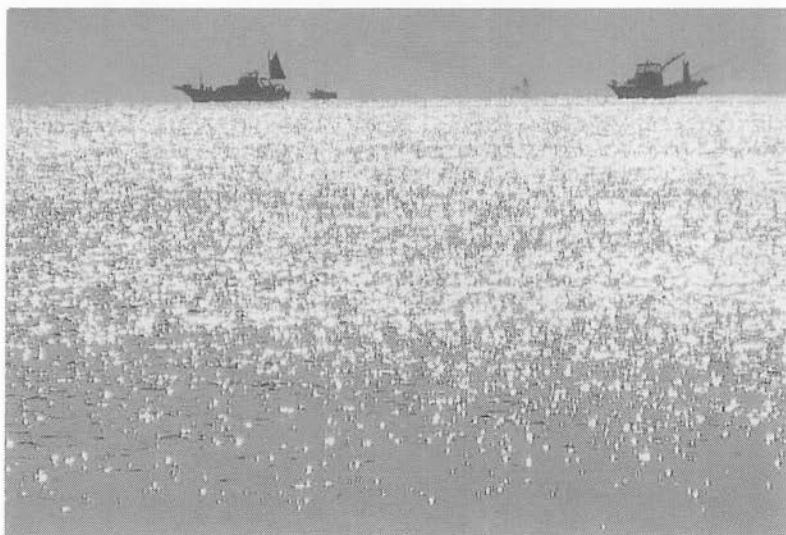
◆ボタ餅食べ放題

ところで、皆さんご承知かも知れないが、高射砲部隊は第一線給与である。しかも戦時手当付きである。連隊ごとに一年間（または半年間）の糧秣が支給され

ている。陣地から丸腰のまま追いやられた部隊は付近の住民を追い出して居座り、やりたい放題だった。

米をはじめ食い物はうんとある。せつかくの恵みをドブに捨てるのはシャクとばかり、かといって住民達にくれてやるなどという仏心はさらさらない。この恵みを利用するにしかずとばかり、豊富な材料を惜し気もなく使い、ドブロクは造るワ、マッカリ（朝鮮酒）は飲むワといった有り様。軍の上層部も黙っている。真っ昼間から赤い顔の兵隊たちがウロチョロ。あんころ餅を食い過ぎて下痢を起こす兵たちもいて軍紀は相当乱れていた。帰国までの一時的な現象だったが、ほめた話ではない。

国の内外に、食い物もなく、餓死寸前の同胞が苦しんでいるというのに、また中国やロシアに追いやられて悲運に泣いた人達もいたというのに、全く申し開きのできない恥じ入る行為が展開されていたのだ、改めてお詫びする次第、妄言多謝！



丹波へＩターン者呼び込もう

―ガイド本『田舎は最高』発行―

荻野 祐一

(丹波新聞社編集委員)

丹波新聞社がエリアにしている丹波市と篠山市の「兵庫丹波」は、高齢化率が高まる一方で出生率は全体的に低下し、人口が徐々に減少しています。このままの状況で推移すると、地域の活力が低下することが懸念されます。農業をはじめ産業全般が元気を失い、コミュニティの担い手が少なくなり、地域の伝統文化が危機に瀕することも予想されます。

ずるずると地域が沈んでいくアリ地獄に陥らないためにも、何とかしなければいけません。そのための手立ての一つが、丹波にＩターンする人を増やすことです。丹波に移り住んで、地域に溶け込み、新しい力を注ぎこんでくれる。そんな人を増やしていきたい。そうしたい思いを込めて、先ごろ『田舎は最

高』という本を当社から発行しました。都市部から丹波市、篠山市に移り住み、地域にしっかりと根を張り、生産的な活動をしてもらえる二十五家族を紹介しています。

著書の平野隆彰さんもＩターン者です。平野さん是一九四八年、千葉県の生まれで、二〇〇四年に西宮市から夫婦で春日町野上野に移り住まれました。出版・編集・広告などの会社を経営されており、著

書として『シャープを創った男・早川徳次伝』『穴太の石積』『僧侶入門』などがあります。フォーラムの開催などを通して、都市部の人たちに田舎暮らしを呼びかける「たんば・田舎暮らしフォーラム実行委員会」のメンバーのひとりでもあります。



丹波に移り住んだ人たちを紹介した

『田舎は最高』の表紙

この本の柱になっているのは、平野さんの丹波新聞での連載記事です。書名と同じタイト



自然豊かな丹波に移り住み、3世代同居をしている家族

ルで、昨年四月から今年七月まで二十六回にわたって連載した記事に加筆し、発行しました。

ふるさと回帰が全国的な潮流になっている今、「なぜ田舎暮らしなのか」「なぜ丹波なのか」を探ろ

うと、平野さんは、丹波にイターンした人々を精力的に取材されました。そのなかで出会った多士済々の人たちが登場しています。

たとえば、大手都市銀行に勤務し、過労のため救急車で運ばれたことが二度あるという元企業戦士。

この人は今、「畑五反・田んぼ一町」の専業農家となり、家族労働の小規模農業にこだわりながら、

「孫の代に自然環境や農業の大切さを伝えたい」という使命感に燃えています。「そこに三尾山があったから」、春日町に移り住むことを決めたという夫婦もいます。

山野遊びの仲間たちと一緒に、八〇〇坪もある荒れた雑木林を開墾し、家を建てました。

「みんなのおうち」というこの家を拠点に、地元の人たちとも親しく交流しながら、仲間達と農作業や

山菜摘み、ザリガニ釣りなどを楽しんでいます。

イターン者は、第二の人生を迎えた人々たちばかりとは限りません。若い世代の人もいます。たとえば、

「いつか田舎暮らしをしたい」と考えていた大工職人の方は、かつて大手ハウスメーカーに勤務し、た

またま丹波に転勤。丹波で所帯を持ち、大工職人と

丹波通信

して独立、宝塚に住む両親を呼んで同居しておられます。仕事で夜遅くに帰ったある日、両親が畑で作った野菜を生で食べ、「明日、死ぬんじゃないかと思うほど、うまかった」と感激したそうです。

丹波で起業した人もいます。機械メーカーに勤務し、ニューヨークにも住んだという男性は五十八歳で退職。妻とともに移り住み、有機農業に精を出す一方で、地元の農産物を仕入れて販売しています。田舎の良さを知ってもらいたいと、有料の「民泊」も始めました。

この本は、丹波に移り住んだ人たちの視点を通して丹波の魅力を発信しています。このほか、平野さん自身のＩターン体験や丹波に対する思い、取材したそれぞれの人たちに対する感想をはじめ、「田舎暮らしへの助走期間にイメージや考えをしっかりと固めて、土地や物件探しをすることが肝要」「土地選びと家づくりとはカミさん主導で」、田舎暮らしをするためのポイントを指南しています。また、サブタイトルが「丹波で暮らそう納得ガイド」となっているように、丹波の古民家や空家事情、丹波の公

共施設、丹波の歴史・気候・風土なども紹介し、ガイド本的な要素も加えています（これらの原稿は私が担当しました）。

平野さんは「田舎は極楽」だと書いています。平野さんに言わせれば、極楽の条件とは、たった二つです。それは、真夏でもエアコンなしで眠れること、小鳥の声とともに目覚める環境であること。そして、こう呼びかけています。「この極楽は、死後世界ではなく、今の世に存在する。さあ、体力のあるうちに、元気なうちに、丹波・田舎暮らしをはじめよう」

十万部のベストセラーになれば、きっと丹波地域の人口は増加に転じるに違いない。これは平野さんと私の夢想です。たわ言と笑われそうですが、罪にはならないでしょう。ちなみに同書の定価は一三〇〇円（税込み）です。購入を希望される方は丹波新聞社（電0795・72・0530）へご連絡ください。丹波新聞社のホームページからも購入できます。田舎暮らしに興味のある方がおられれば、どうぞお薦めください。私たちの夢想の実現に、みなさまのお力をお貸しくください。

変わる丹波・変わらぬ丹波（1）



←「丹波竜」発掘現場。重機で掘り出した後の空洞は白いコンクリートで覆われた。上部の白い水しぶきは篠山川の清流（上滝）。

→発掘現場を見下ろす地点に展望台を新設。説明ボランティアも常駐し、週末には二人に増強。



←さらに上流から見た発掘現場。典型的な河岸段丘や地層が見学者を迎えます。

丹波を撮る

変わる丹波・変わらぬ丹波 (2)



撮影者：徳田八郎衛

←2007年元旦、氷上町本郷の夢タウンでは10時開店前から駐車場前に大行列が発生。この11時撮影写真では駐車スペースが残り少なくなっています。

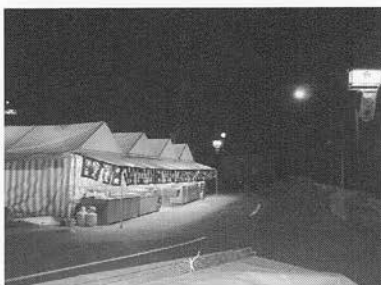
→来場者の大半は、若夫婦とチビっ子たちです。店内には俄か神社が出現し、福引に人気が殺到。これも初詣の一種なのでしょう。



←2006年10月1日JA丹波ひかみの店舗が統廃合され、前号「北山坂」で紹介した柏原町北山の新井店も廃止の憂き目に。そこで地元の元郵政マン上田廣明さんが丹波市初の民間委託「柏原北山簡易郵便局」を開局しました。JA商品との競合でJAに委託できなかった簡易保険や小包も扱えるようになって住民は大歓迎。ATMは置かず、すべて手作業なのでお年寄りには喜ばれています。

雨の中の柏原・厄除祭

今年の厄除祭は、ちょうど祭日の2月16・17日が週末となりました。期待して取材したのですが……



←金曜日夜、交通規制に護られて屋台店は設置完了（古市場公民館前）



土曜日午前10時、まだ出足は鈍い→



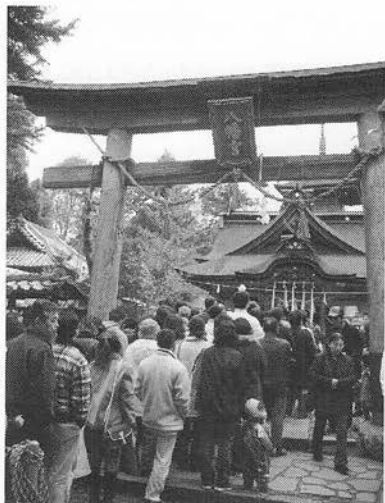
←柏原駅0957発の上り列車から下車したのは30数名。昭和20年代なら数百名は降りたのですが……。



←かつて石田本通はバス道路なので屋台店はなかったが、今は歩行者天国の屋台地域。その分、屋台店は拡散したともいえます。

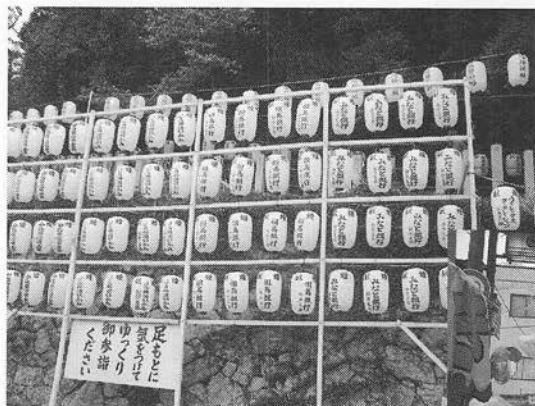
丹波を撮る

雨の中の柏原・厄除祭 (2)



←だが境内は善男善女で一杯でした。

↓アベックも多いので正面からの撮影を自粛しました。



←献灯の金融機関名にも栄枯盛衰が見られます。

↓屋台店にも甘酒などは見当りませんが、代わりに不動産業などがお目見えしました。



翌日、日曜日の人出に期待しましたが、雨は止みませんでした。

檜皮の里、旧上久下村に行く (1)



←阿草、西脇、篠山への三叉路で古代からの要路、古峠
↓阿草の土蔵。かつては煙草乾燥場として利用された。



←上滝の茅葺屋根

↓北太田の茅葺屋根



丹波を撮る

檜皮の里、旧上久下村に行く(2)

太田の名刹・慧日寺



←方丈と鐘楼

↓仏殿裏の池に産み付けられた
モリヤマ蛙の卵



←伝説を秘めた八百姫髪塚



鐘楼側の菩提樹は花盛り→



恐竜の化石と博物館活動

岩 槻 邦 男（市島町）

関東に暮らしていると、丹波はずいぶんローカルなのだと感じることがある。いい意味で丹波のニュースが取り上げられることはきわめて稀だからである。

二〇〇七年は、しかし全国版でも新聞各紙に、一月四日付けの朝刊に絵入りで丹波が取り上げられる年明けとなった。恐竜の化石が話題を賑わわせることになったからである。その後も、引き続き全国版のテレビ番組や新聞の全国版で取り上げられている。まだまだ話題を盛り上げるはずである。もっとも、関西地域での取り上げられ方と比べると、やっぱり丹波はローカルであるという事実を否定することにはつながらない。一月四日の新聞紙面にしてからが、関西版は各紙とも一面記事だった。

わたしたちの学年は小学校へ一度も行ったことのない学年である。わたしたちの入学に合わせて小学校が

国民学校に変わり、わたしたちが卒業した年に、現行の六三三制が始まった。そういう時代背景だったから、

国民学校へ進んでからは、戦時体制に覆われてしまった。一家揃っての団らんなどという余裕はなくなっていた。しかし、その前には、時代は緊迫していたものの、丹波の暮らしにはまだ人間らしさが生かされていた。就学前の幼いわたしの記憶の片隅に、川代溪谷の花見の点景が残されているのである。上久下駅を下りて川代まで、川沿いの堤防を歩いた。発電所あとの傍を通ったのだった。それだから、化石の発掘場所へ行って、幼い頃のわたしが踏んだに違いない化石を、今発掘しているのだという実感が、化石への親近感をいっそう深めてくれたものだった。

わたしが人と自然の博物館「ひとはく」の活動に参画して五年目になる。「ひとはく」が新展開と呼ぶ積極的な博物館活動を始めて二年目からの経験である。自然史の研究教育に長年かかわっていて、日本の博物館活動の低調さに焦燥感を持っていたので、「ひとはく」の、とりわけ若手が、まさに今求められる博物館活動を積極的に模索する活動に我が意を得たりと、過

激な檄を飛ばしたりして第一期の五年を大きな手応えとともに終えようとしていた。

そこへ、化石の発見である。詳細を紹介する紙幅の余裕はないが、この発見、単なる偶然の積み重ねではなく、「ひとはく」だからできたことであると確信を持っている。だから、館内では、みんなが頑張っているところを、今では意識ある県民に評価してもらっているが、神様からも後押ししてもらっているのだ、と、自然科学者にあるまじきことを平気で言いふらしている次第である。こういうことは、報道には出てきっこないので、背景としてこういうところで紹介しておきたい。

ところで、教育論議がかまびすしい。考えてみると、日本の学校教育体系はすばらしいものだった。(だったと過去形で表現する。)百三十年前、鎖国の扉を開いて、西欧文明のすばらしさに感動した先達たちは、西欧に追い付け追い越せと、学校教育の制度を整備し、確かに見事に目的を達成した。新島襄先生は教育は百年の計と断ぜられたが、その成果を誇れる状況に達したのである。そして、その成果は何を生んだか。まず、

豊かな生活、安全な日々をもたらしてくれた。しかし、西欧的論理は戦争も持ち込んだし、無計画な開発による環境問題も次世代に積み残そうとしている。明治維新の際の先達は、西欧文明を是とし、それを自分のものとするという目標に向かって邁進した。しかし、今、日本は何を目指そうとするのか。百年後の日本をどのように創ろうとして学校教育を行っているか。

学校教育の体制は整えたものの、教育という日本語の枠内の活動に拘泥したために、得るものの大きさと平行して、わざわざいも持ち込んで来た。自ら学ぶことを放棄してしまったことはその最大の癌の一つではなかったか。学校教育偏重で、博物館等施設を活用した生涯学習に、日本人はそっぽを向いて来た。博物館もそれで平気でいた。その弊害こそが、今問われなければならぬ課題である。

□先であしろ、こうしろといっているでも始まらない。要求するだけでなく、行動で示されるべきである。「ひとはく」では、日本の博物館ができなかったことを、日本で実現しようとしている。兵庫県内の意識の高い層には、着実に活動の輪を広げている。ただし、

博物館を覗いても見ない無意識層にはなかなか近づけないでいる。日本ではメディアのこの面での意識の低さが、無意識層の無関心を放置することにつながる。

「ひとはく」の活動に、神様の助けがあるというのはそこである。恐竜なら、メディアも大きく取り上げてくれるし、子供たちも夢を膨らませてくれる。昔子供だった大人たちも損得を超えて関心を抱く。これを天佑としないではない。「ひとはく」では、従来の展示の枠を超えた「演示」によって、さらなる博物館活動を展開し、兵庫県民の自然環境に関する学習活動を支援すると同時に、日本の博物館活動の活性化に先導的な役割を果たしたいと念じている。二〇〇七年のメディアでは丹波の恐竜が全国版になったが、実際には「ひとはく」が全国版の貢献をすでに始めているのだということを見失わないでいただきたい。



夏の日の出来事

尾崎 美代子（市島町）

今朝、私は驚きの大発見をしました。

まだ乾ききっていない土をつけたせみが穴から出てきて、地面を這っているのを見つけました。羽化する場所を探していたのでしょうか？

「ちよっとかわいそうかな」と一瞬思った気持ちをかき消して、そのせみをそっと手にしました。

近所の小さな男の子に羽化するところを見せたくて、迷うことなくその子の家を持って行きました。家族みんなでも喜んでくださいました。

「よかった」、内心ほっとしました。いらぬおせっかいと思われるかと心配だったのです。

子供のころの田舎での懐かしい思い出がよみがえってきました。もう遠い昔のことなのに……。

毎年夏になると朝早くから夜遅くまでせみの鳴き声が聞こえたものです。夜になると電球の光を求めて、

せみやクワガタ、コガネムシなどが飛び込んできたものです。

ここ、逗子でも毎日朝早くから夜遅くまでせみの鳴き声は聞こえます。例年だと夜になると時々せみが光を求めて飛び込んでくることはありますが、田舎でも見たこともない羽化前のせみが地面を這っているのを見たのは初めてで、大きな驚きと感動の瞬間でした。

何年も暗い土の中にいて、やっと明るい地上に出てきて羽化してわずか一週間ぐらいの命。与えられた、ひと夏のたった一週間の命を惜しむかのように朝早くから夜遅くまで鳴くせみ。

でも、私に捕まったばかりに、あのせみは残り一週間の一番大切な時を失ってしまったのです。

小さな男の子から、羽化することもなく死んだあのせみのことを聞かされた瞬間に、私のあの時の驚きと感動は心の痛みに変わってしまったのです。

今も与えられたひと夏のわずかな命を惜しむかのように鳴くせみの声が聞こえています。暑い夏をもっと暑く感じさせるかのように……。

セルビアの技術指導について

酒井 重 男（柏原町）

東京に出てきて、そろそろ五十年近くになろうとしており、関西人というよりは関東人になったような気がします。

さて、今度、英国の欧州復興開発銀行（EBRD:European



Bank for Reconstruction and Development) のビジネス・アドバイザーサービスのプロジェクトとして、セルビアで技術指導を行いました。すなわち、セルビアの首都ベオグラードから車で約二時間のところにあるKranica Divic(株)（以下、K社）において、畜産固形副産物の有効利用について、二〇〇六年十月から一週間ずつ三回技術指導を行いました。

セルビアといってもご存知でない方が多いと思いますが、セルビアはイタリア半島の海を隔てた北東に位

置する元ソ連領のユーゴスラビアに属し、ロシアの支配を受けていましたが、一・五年位前に独立しました。日本からはオーストリアのウィーンまで飛行機で約一二時間、さらに、セルビアの首都ベオグラードまで約一・五時間かかります。この地域はその外にも、ヘルスゴビナ、マケドニアなど多くの独立国があります。

セルビアの気候は、冬は東京より少し寒いようですが、五、六月の日中の気温は二三〜二六℃で過ごしやすいところです。国の面積は日本の約四分の一、人口は約一一〇万人の小さな国で、農業と牧畜を主にしております。

ベオグラードはヨーロッパ最古の都市の一つで、アテネとローマに次いで今日最も古い首都であります。ケルト人がサヴァ川とドナウ川の合流地点に定住し始めたのは紀元前三世紀のことです。また、ベオグラードはアジア・ヨーロッパを結ぶ交通の要所で、ヨーロッパの歴史上、地理的にも戦略的にも重要でありました。そのため、先例のない破壊、長年に亘る包囲と搾取、度重なる国家、支配者、住民の変遷をもたらし、不幸にも平和と発展の期間は限られたものであ

りました。二〇〇〇年にわたる歴史は街の三〇以上の名前や愛称を与え、街にはベオグラード城の跡が残っており、その近辺はカレメンダ公園となっております。

セルビア人は、あまり働かず日本人の二分の一〜三分の一位といわれており、ベオグラードを歩いていても、喫茶店の前に椅子を並べてコーヒーを飲みながら、のんびりとおしゃべりしながら過ごしている風景を至る所で見かけます。月収は日本の一〇分の一位といわれております。

技術指導したK社はベオグラードから二時間位の田舎の真中にあり、周りは草原の小高い丘に囲まれた小さな会社です。ベオグラードを離れますと、会社までは舗装道路が一本通っているだけで、両側は草原で所々に牛や豚の姿を見かけるくらいで、人の姿はほとんど見かけません。

K社は一九八一年から現在地に設立され、企業は国営から民営化され、社員は五八名の小さな会社です。この会社は一年から一・五年生育した牛を一日に五〇〜六〇頭、豚を三〇〜五〇頭を屠殺し食用に供しています。この会社は肉以外にあまり食用に利用していな

かったので、肉以外の副産物の有効利用について指導しました。日本はBSEの問題が起こるまでは、あらゆる臓器も捨てる場所がないくらい有効に利用されていきました。

それで、K社に対して次のような日本の状況について説明しました。①脂肪の利用…熱処理して麵油、ラード、マーガリン、菓子などの種々の食品に利用している。②骨の利用…油を採る、骨を粉碎、乾燥し、圧力釜で一三三℃、三kg/cm²、二〇分処理し肥料にしている。③血液のコンポスト化条件…牛は肥料として使用されていない。豚は肥料として利用している。④角の利用…肥料にしている。⑤尾の利用…スープ、煮込み、スライス焼肉など。⑥胃、腸の内容物…オカラやオガクズと一緒にコンポスト化し有機肥料として利用している。

次に、K社への指導として、第一は現在、血液は川に垂れ流されているので、千葉県で行なわれている③の血液のコンポスト化を勧めました。すなわち、血液一〇〜二〇ℓずつ小さな装置に入れ、蒸気処理して凝集、固形化後、乾燥し、堆肥として利用する方法であ

る。第二は胃や腸の内容物は現在、敷地内に大きな穴を掘りそこに投棄しているので、千葉県で大規模に行なわれている胃や腸の内容物を廃水汚泥などと一緒に

コンポスト化し有機肥料にする方法である。これらについては恐らく直ぐにでも実行されるものと思われ、少しでもお役に立てれば幸いである。

極楽とんぼ

大島 信 子（春日町）

（旧姓・高見）

子供達も巣立ち、夫婦二人の生活となった今、立ち止まって振り返ってみました。

忘れもしない平成十年十月十日、箱根にある金時山に登り、富士山も拝め、幸せな気分下山中、不注意で足を滑らせ尻もちをつきそうになった私は、咄嗟に右手で体を支えました。ピリッときたような気がしたものの、たいしたことはないと思っていたのですが、二、三日経っても痛みが消えないため、病院へ行ってみると、肩の筋（四本あるうちの一本）が切れてい

るとの診断。「前にならえ」までは出来るのですが、それ以上手は上がりません。「手術しなければ一生このままです」と言われ、迷ったけれど手術に同意しました。

その手術は十一月十日午後一時に決定。ストレッチャーに乗せられ手術室へ。麻酔注射後七秒位で記憶無し。気がついた時は次の朝。体には管がついているし、肩から腕にかけてロボットアームのような装具がつけられていました。同室の人の話によると、一晩中痛い痛いとうなっていたそうです。一週間で抜糸、二週間目からリハビリ開始。退院のめどは六十度位腕を持ち上げ十五秒位保てるようになればとのことだったので、目標に達しないまま一か月で退院しました。

自宅療養中の二か月間、家事は一切ダメ。私の仕事はリハビリに専念するのみで、その間の家事は主人が



山形・蔵王にて

一手に引き受けてくれました。勤めをしながらなのでへとへとだったと思いますが、グチも言わずよくやってくれました。リハビリ七か月でようやく普通の生活に戻りました。ぶら下がり等はいまだにこわくて出来ませんが……。

※

最近同窓会の案内がよく届きます。いつも誘い合っ
て参加させてもらっているSちゃんは多利の保育所か
ら柏高までずっと一緒だった一日違いのお姉さん。今
も、千葉県の隣り合った市に住んでいます。丹波で産
湯をつかい、数年で還暦を迎える今日まで、つかず離
れずお互いの人生を見て来ました。不思議なご縁だと思
っています。

これまで「なるようになるさ」と日々を送って来ま
した。まだまだ続くであろう私の人生、極楽とんぼと
笑われようと、このスタイルで過ごそうと思っていま
す。

かくも愛しき存在——PART II

岡田昌子（柏原町）

孫のような愛犬と暮らすようになって六年になる。動物に触れなかつた私が「犬を飼うといいわよ」と、人の迷惑顧みず強引に勧めるに至つたのには理由がある。

一〇年近く前になるだろうか？ 仕事関係の研修時において厳めしく語っておられた精神科医が「精神安定には犬がいいですよ」と、如何にも愛おしくてしやうがないというように相好を崩された。「こんな大先生がこんな顔になるんだ……」と、その時の印象がいつまでも心に残っていたようで、その後何年かして愛犬との暮らしが始まったのだった。

子どもの思春期と親の思秋期（中年の危機）はどうしようもなく重なり合う。親も子も生きることの大変さに葛藤せざるを得ない日々が運悪く同時に訪れ、「家族の危機」といわれるカオス的狀況ができ易い。

「家族の危機」をそれほど意識することもなく、上手に乗り越えている家族が一般的だと思われるが、問題のない家族はありえない。家族はともすれば甘えが過ぎて依存的になり過ぎたり、本音が激しくぶつかり続けて崩壊しかねない状況が、特にこの時期に夫婦間・親子間に形成され易い。家族の成員がある程度気持ちよく暮らせ、「家族」として居続けるには、それぞれのそれなりの「緊張」と「努力」が必要になる。

「狭いながらも楽しい我が家」は日常にあるわけではなく、家族ですら何とも難しい錯綜した関係が存在するのであるから、他人との関係ともなれば尚更である。他人に対しては、家庭でのあり方とは逆で、その感情表現は往々にして異なるものだ。本音はそれなりに隠しつつ、何とか体裁よく相手に合わせようと気を遣う。意識、無意識に拘らず、人はそれが処世術になっている。個人差は当然あるが、一方的なその気の遣い方は程度によつてストレスを作る。意識的な発散がなければストレスは知らぬ間に蓄積されていく。家庭内での折々の暗雲垂れ込めた雰囲気や他人との厄介な関係を上手に受け止め、はざまを繋ぎ、収めて

くれる人が常時居たならば、様々なトラブルが現在の社会現象のような事件や犯罪にまで行きつくことはないであろうと考えたくもなる昨今である。

確かに人が、家族として仲間として役割（専門家）

として、家族や人間関係に介入し、その関係性をより良く創造していくことは可能である。しかしながら、常時というわけにはいかず、また、人との関係は関係の境界線が曖昧でどこまで入り込んでいいのか、どこで引けばいいのか、人の本音が見えない判断がとても難しい。専門家のスキルを駆使してさえも難しいこともある。良かれと思つて一線を越えたことがトラブルになり、憎しみや恨みに転じることはよくある話で、愛憎紙一重と言われる所以である。夏目漱石曰く「知に働けば角が立つ。情に棹させば流される。とかくこの世は生き難い」。本当に人間関係は年齢に関係なく難しいものである。

しかしながら、犬にはこのややこしさが無い。その境界線を心配するには及ばない。「押して駄目なら引いてみな」式に犬となら何度でもいい関係に創り直せる。確かにちよっかいを出し過ぎて嫌がられることは

度々あるが（我が愛犬は辟易しているかも）、とても気安く気楽に安心できる深まる関係がここに存在する。真の信頼関係を実感することができるのである。



アニマルセラピー、ペットセラピー、ドルフィンセラピー等が実際に心の治療法としてあるように、犬だけでなく動物は本当に人の心を癒してくれる。どのような動物も人の心を癒すスキルを遺伝的に身につけているのではないだろうか。愛犬を通じてそう思える。

我が愛犬はストレスを瞬時に綺麗に吸い取ってくれる。愛犬の話をする度に相好が崩れる私である。

還暦すぎて古稀に

徳 義 通 夫（春日町）

中高年の身体的変化や心の危機を語るとき、思春期に対して思秋期というそうで、人生の秋を知る年代ということらしい。私は人間の年代別分類によると前期高齢者の部類に入るようだ。

鏡を見て髪の毛が薄くなったのを嘆き、会社も定年地位もこれまでだったのかと悟り、若い娘におじん呼ばわりされても脂に下がり、趣味といえばゴルフか麻雀だった。もう手遅れなのに食後に必ず歯を磨き、同情を誘おうとして自分の病歴を大げさに言いふらす。私はこれらの連中に同情的であり、なんとなく可愛げがある。私もそうだから。

横浜市からは「健康手帳」と称する小冊子、「介護保険保険者証」、厚生年金保険料は払わなくてよいことになった。六十五を越えてから、あなたは年寄りですよ、といわんばかりになんだかんだとドット送られ

てきた。

医療費も一割負担になった。私もこの年になり病院通いが多くなり、大助かりだ。

JRのジパング倶楽部にも入会資格ができた。運賃は三割引の旅行ができ、遠方の旅行には実に助かる。

映画館は割引があり、横浜市では、バスや市営地下鉄の割引バスが支給される。私も昼の日にバスに乗ることが多くなった。まさに年寄りばかりが乗車している敬老バスとなっている。その老人がみな敬老バスの利用者である。これではバス事業は赤字になるのは明らかだろう。

年を取ることによって与えられた権利のようになっているが、厳しい地方財政の中で、これほどまでに年寄りを優遇する必要があるのか、ちょっと疑問を感じている。いずれ横浜市は市長の方針で現在の年寄りの優遇処置もなくなっていくのだろうか。

そして厚生年金が振り込まれてくるようになった。就職して以来長い間、安い給料から確実に天引され納付してきた。これはこれでありがたい。これまでの蓄えと贅沢さえしなければ夫婦二人十分にやっていける

額である。

高齢者の命の綱であるべき年金、介護、医療がいろいろと問題になっている。今、私がもらっている年金の額はこれでいいのかと疑問に思うし、介護保険料だけは確実に年金から控除されているので、ちゃんと介護されるのだろうか。コムスンのテレビコマーシャルは、介護師に手厚く介護され、幸せな老人が放送されているが、現実の介護施設はそうなんだろうか。虐待されている話しも聞くし、自分の先行きが心配になつてくる。

利益追求型の「グッドウイル社」や「わたみ社」が社会奉仕的な事業であるべき介護事業をやるはずがない。利益を上げるためには何か不正がなければ成り立たないだろう。

私は趣味の一つに三十年來尺八を習っているが、お稽古事は年金生活者にとって費用がかかりすぎる。今は費用の安いカルチャーセンターで習っている。定年後には気のきいた趣味を持つと誰でも考えているが、趣味は時間と費用と家族の協力が必要である。よく考えて選ばなければ長続きしない。

もう一つの趣味が巡礼である。二年掛けて四国八カ所を巡ってきた。坂東三十三観音、秩父三十四観音を結願した。徒歩を原則としたが、きつい所は路線バスや電車を利用したので、少し後ろめたさを感じている。

もう一つがウオーキング。この最大の実績はお江戸日本橋から京都三条大橋まで旧東海道を踏破したことだった。

どの趣味の会でも同年輩の雑談では、病気の話か、年金の話、葬式の話、あげくのはてにはお墓の話に発展していく。

みな老後を心配しているのか、それとも話題がないのか困った連中である。



故郷の空が教えてくれた

東野 恵 子（氷上町）
（現姓・伊藤）

「ラッキーだったですネエ。いや、ホント良かった」。のっけに切り出されたこの言葉で、私は全てを悟りました。

丹波・成松のゆったりと流れる時間の中で十八歳まで過ごした私は生来のノンビリ屋。そんな持って生まれた私の性格を、丹波のおいしい空気と水は一層ノンビリとした性格に磨き上げてくれました。私は少女の時代から人より、やること成すことが少々遅めで、傍目にもおおかというか、能天気な少女だったようです。大柄だった私は、豊かな自然の中で、一層、おおらかな少女に育っていったのです。

「病は気から」と申しますが、ノンビリ屋で何事にもあまり頓着しない性格からか、私は長い間、病気とは無縁の生活を送ってきたのです。少なくともあの日ま

では……。しかし正直に言うと、私は心のどこかでいつも不安に掻き立てられていたような気がします。意識していた訳ではありませんが、心のヒダに小骨が刺さったように、いつも無意識下に離れることなく不安が突き刺さっていたと言えるかもしれません。その不安とは、自分がいつかガンになるのでは？ という不安です。既に亡くなった私の両親の死因はいずれもガンでした。主人の家系もガン家系であることも不安に拍車を掛けていました。「いつか、私も……」。そう私が思うのも自然な反応でしょう。

私のガンが見つかったのは、全くの偶然で、一年に一回の定期健康診断からでした。今年もまたいつもの病院で健康診断を受けたのです。そして、その時、異常が発見されました。直ぐに内視鏡による精密検査。その時、私に医者から告げられたのが冒頭の言葉だったのです。

突然自失とはあのような状態を言うのでしょうか。

「ラッキーだったですネエ。いや、ホントに良かった」という医者の言葉を最後に、私は言葉のない暗闇の世界に吸い込まれていったのです。もう何も聞こえ

ませんでした。下界から遮断された真空の世界。もし、あの時、主人がそばに居てくれなかったら、私は言葉のある世界に二度と戻って来れなかったかもしれない。私が音のある世界に戻ってきたのは一〇分以上もたつてからのことです。

二〇〇七年七月の梅雨空を、私は病室の窓から眺めていました。白で包まれた無機質の部屋の中にいながら、私は自分のラッキーさを喜ばずにはいられませんでした。病気らしい病気をしたことがない私にとっての初の入院生活が、大腸を二十五センチも切除するという大手術から。さすがに術後の三日間は痛みに襲われましたが、それを過ぎ、一週間の点滴期間を終えた頃には、「私は病人か？」と自分でも疑うほどの回復力を示したのです。私の生来のノンビリ屋の性格が大いに味方したことは間違いないでしょう。またいろいろ種類があるガンの中で、私のガンはおとなしい性質のようで、私の身体の中でじつと静かにしていてくれたのもラッキーでした。

早い発見だったこともラッキーです。あと一ヶ月も受診が遅かったら、結果は違ったものになっていたか

もしれません。加えて、健康診断を受診した市立病院が大腸ガンに実績がある病院だったこともラッキーでした。三週間の入院は私にとっていいリフレッシュ期間だったと今になって思います。痛みがなくなつてからの後半二週間の入院生活は快適そのもの。本を読んだり、親しい友達と話したり、普段できないことをして毎日を過ごしました。今の勤め先の人たちも、「ゆつくり療養して戻っておいで」と言ってくれます。そんな人たちに囲まれていたこともラッキーでした。自分を見つめるのに三週間は程よい期間だったといえます。思えば、丹波を出てからの私はずっと都会暮らしでした。安全山から吹き降ろす木々の新芽の香りを含んだそよ風も、甲賀山に咲く花の匂いを感じることもない都会の中で、四十年近くも過ごしてきました。そして知らず知らずのうちに私の心は物事に感動すること、哀れみを感じることもきつと少なくなり、無機質なものになりつつあったのではないでしょうか。

考えてみれば、丹波で過ごした時間は、私の人生の四分の一にも満たない短い時間。それでもその四分の一の時間が、なんと私に多くの影響を与えたことでしょ

う。人生に必要なのはお金でも地位でも社会的名声でもありません。健康に加え、素朴な心、美しいものを見て美しいと感じる素直な気持ち、心から有難うと感謝する気持ち、そんな心掛けが一番大切なのではないでしょうか。それが気の置けないたくさんの友人に囲

まれる幸せを招くことになる気がします。そんなことを気付かせてくれたのは、病室の窓から見える空のせいで、その空が丹波に続くという事実が、ふと私に思い起こさせてくれたように思います。いつか帰りたい、あの空を追いかけて……。

わが定年後のサードライフ

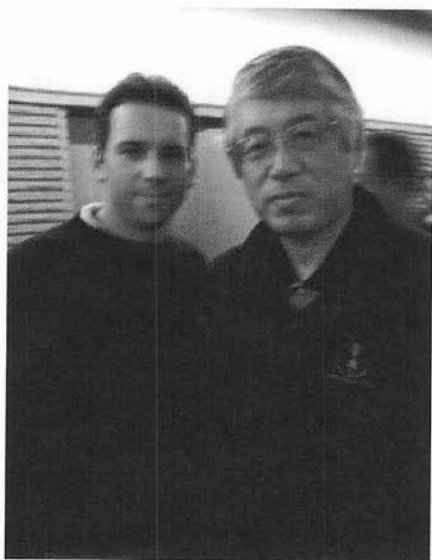
直田 正（山南町）

東京での生活は一九六八年春、大学入学で上京以来早や三十七年目（二年間のデンマークでの海外駐在を除き）を迎えました。入学後二年間お世話になった尚志館、コンパで散々歌った（実際はわめいたといった方が正確でしょうが）デカンショ節。今となつては懐かしく思い出します。その後、歌う機会がほとんどないので残念ですが、その歌詞にもある丹波の山猿、花のお江戸で芝居する”。私の東京での猿芝居ももうそ

ろそろ店仕舞いし、里山に戻る時期が近づいて来ているかなと認識し、セカンドライフを模索する昨今です。余談ですが、退職後を世間ではセカンドライフと言っています。私にとつてはしつくりしません。これは“第二の人生”そのままの和製英語だそうで、英語では Post-retirement Life と言ふようです。マスコミは標語を作りたがりですが、その傾向に乗つたとしても本来は“サードライフ”ではないでしょうか？ つまり、ファーストライフはこの世に生を受けてから学校を卒業するまでの親のすねかじり時代（又は、親の人質時代と言つてしまつては言い過ぎか）、セカンドライフは社会人となり、サラリーマンとしては会社の人質時代、従つて退職後、自分自身、コミュニティー

に向き合いマイライフをマネージするのはサードライフだと思うのですが……。

そのサードライフのヒントとして、ある時新聞で偶然見たのですが、綾部の塩見さんという若い方が「半農半X」というライフスタイルを提唱されています。つまり、生活の半分を自然にやさしい農で出来るだけ自給し、あと半分を自分自身の中にある何か（Mr Xとして、昔こんなプロレスラーがいたなあ）でもって地域貢献するという生き方。これがナウい（これも



太平洋マスターズでの筆者と
セルヒオ・ガルシア選手

古いなあ！）感じがします。環境問題等を考えれば、ええんじゃないでしょうか。

昨年、三十数年のサラリーマン生活にとりあえず終止符を打ち、今は残された東京での時間を有意義に過ごすべく、いろいろな機会を捉え、数々のセミナー、フォーラム、講演会、またボランティア活動に顔を出しております。

その中で今最も力を入れているのが男子プロゴルフトーナメントのボランティアです。既に太平洋マスターズ選手権、日本ツアー選手権でギャラリーコントローラー、スコアラー、キャリングボードを担当し、選手と一緒に18ホールを回り、自分がプレーしているような緊張感を味わった次第。もともと、その時のイメージが未だに残像としてあり、自分のプレーと比較し、飛距離、球筋のあまりの違いにガツカリさせられています。次回八月末のフジサンケイクラシックにも応募し、四日間参加する予定です。ハニカミ王子こと石川遼君も主催者推薦で出場するそうで、運が良ければ一緒にラウンド出来るかもしれません。楽しみです。

息子の転勤に思う

今 田 一三夫（春日町）

私には二人の息子がいる。いずれもサラリーマンである。二人とも就職と同時に寮に入ったので、私達夫婦二人だけの生活が以来十六年となった。次男には二人の娘がいて、上は小学三年生、下は幼稚園の年長組である。私がかわいくて仕方がない孫娘である。

その次男が今年三月に福岡へ転勤となった。これまで二年間、静岡市に住んでいた。この間に私達は新幹線やマイカーで度々出かけ孫娘とよく遊んだ。駿府公園で燥ぎ廻ったり、静波海岸で砂遊びをしたり、また御前崎灯台から遠州灘を一望、三保の松原から富士と駿河湾の眺望をながめ、日本平で久能山東照宮へ参拝したこと等々、今ではよい思い出となった。

それ以前は新浦安に住んでいて、近かったので毎週のように子守を兼ねて訪れた。東京デイズニーランドへは年間パスポートを買って入場するほど、孫達がミッ

キーやミニーなどのショーが好きだったので、いやというほど付き合わされ、童心に帰った気分だった。

「おじいちゃん」「おばあちゃん」と寄って来て、いろいろなことを話してくれるので、笑いが絶えず誠に愛らしいものである。時には疲れることもあるが、それ以上に元気を与えてくれるので何よりもよく効く薬である。

私達は親と違って育児について直接の責任がない気楽さが楽しくしているのかも知れない。また、私の子供は男児であったが、孫は女兒であることも余計にかわいいのかも知れない。その次男や孫達がまた遠くへ引越すことになり、私は大変さびしい思いに陥った。九州へはこれまでのように頻繁には行けないからだ。孫達とも顔を合わせる機会が減るのは残念で仕方がないのである。振り返れば私自身も親を同様の立場にしたことに今、後悔の念を憶える。

私は旧船城村（現春日町）の出身で、昭和三十二年柏原高校を卒業と同時に金融機関に就職、大阪の支店に入った。ふるさとを出発する時、母が生生駅まで送ってくれたことを忘れていない。私は次男坊だったので



大宰府政庁跡にて筆者 (2007. 5. 21)

家を出なければならぬのは当然だと思っていたが、いざ出立となると、長い間世話になった母と別れることは大変寂しく断腸の思いだった。特に私が小学二年生の時に父を亡くしていたので、戦後の物不足のうえ、貧乏農家の母は生きていくのが精一杯で、私を育てるのにどれほど苦労したことだろうと思うと、こみ上げてくるもので胸が詰まり、蒸気機関車が引つ張る汽車のデッキで、姿が見えなくなるまで手を振りながら涙

を流し放しだったのが今も脳裏に焼きついている。

結婚後、千里ニュータウンに住み、息子達が誕生した。私は親孝行をしようと母を連れてきた。都会などへ出たことのなかった母（現在と違って旅行などする家庭はほとんどなかった時代だった）は、その後一人で遊びに来るようになった。これには私は驚いたのである。親というものは子供や孫のためならどこへでも出かけて行くし、行けるようになるのだとつくづく思ったものだ。

そして昭和四十四年の暮、私は東京へ転勤となった。当時、何故私が東京へ行かねばならないのか、千里団地で落ち着き、万国博覧会を目前にして楽しい生活に入っており、母も喜んで度々訪れてくれていたのにと残念極まりなかった。母も東京はさすがに遠いので到底行けないと悟り、ガツカリしたに違いないと私は思った。これが母との再度の別れでもあった。

東京に着任した翌年母を呼んだ。母は新幹線からはじめて見る富士山や、巨大ビルが建ち並ぶ東京の街を見て喜んでくれたと思うが、翌々年七十三歳で逝った。私が三十四歳の時だった。もっともっと親孝行したい

と思つていた矢先で、後悔先に立たずだった。

私の東京での勤務は渋谷を皮切りに、日本橋、大手町（審査部）、銀座、虎ノ門（公務部）など都心店であった。最後の第二の職場は、東京駅前の八重洲口店の階上にあつた関連会社の総合研究所であり、そこで定年を迎えた。田舎者の私が正に花のお江戸で芝居する境地であつた。結局関西地区へは一度も帰ることなく、銀行員生活の大部分を東京で過ごしたのである。ふるさと丹波を出て、今年で丁度半世紀、古稀を迎える年齢となり、歳月経過の早さに驚嘆する。思えば

折々の記(4)

井本義一（柏原町）

〇―執筆を担当した二月二十五日（土）自治会の三月一日号緑地活動日記より―

荒川静香のゴールドメダル快挙を祝うかのような今

高度成長の真っ只中を無我夢中で働き、苦しい時もあったが、全てが右肩上がりのやり甲斐のある時代であつたことは幸運であつたとよくよく思う。

息子の転勤については普段から覚悟はしていたが、サラリーマンの宿命とはいえ、肉親と遠く離れて暮らすことはさびしいものである。私が母に与えたと同じ辛さを今回息子から受けることになろうとは、運命のいたずらとしか言いようがない。息子一家の健康と孫達が素直に成長してくれることを祈つてやまないこの頃である。

日の快晴、絶好の作業日和。先ず、小田急住宅下の奥に自生したコナラ、どんぐりから芽生えて一―二年目くらいの若木を二十本余り掘り上げた。それをお祭り広場の、以前チガヤの根を掘り起こした辺りに一定間隔で植え付けた。

花を呼ぶ夜来の雨のお陰で若木の掘り上げ作業も、植付け作業も順調に進み、植付け箇所には十分水をやり、踏み固めて地中の空気を逃がした。その後、過去、

落ち葉を積み上げて熟成させた腐葉土をたっぷり掛けた。早く根付いてくれよと祈るや切。

植樹作業を終えてから、しつこく生え茂る笹の刈り取りと、梅の成木の掘り起こし及び植え替えをした。たった一本ながら、この梅の木の掘り起こしは皆で力を合わせても、なかなか大変な汗噴出しの大仕事だった。

地球温暖化による自然、森林破壊が進むなかで、ささやかながら自分の力を精一杯使い、里山づくりに参加し続けることができる健康を、作業後のシナモンの香りいっぱいミルクティーを頂きながら感謝した。

(18・3・1日)

○連日の腕立て伏せの筋肉トレーニングをはじめとする全身の足首から上の捻転運動、首回し運動、両手の前、後ろ回し運動、後ろ歩き運動等の結果、首まわり、上下腕部の筋肉部分に、いつも軽く巣くっている感じの痛みではないが、鈍いしこりみたいなものについて考えた。結論健康維持上の勲章と感謝している。

いま盛んに言われている運動をするということは、身体を動かす(人間も動物だから)ことによって各部

の筋肉を使って、体内の脂肪を消費し、老廃物も汗等で排出し、新陳代謝が促進され、減量にもOKだと思う。

前記しこりは人間の身体の仕組みは同じだから、たとえばイチロー、松井秀喜、荒川静香や、体操、サッカー、柔道、相撲、ラグビー等あらゆるスポーツを毎日黙々とやっている人達も例外でなく、いつも仲良く抱え込んでいるのだと思う。

三月二十一日、WBC世界一の爽快感の余韻さめやらぬ四月九日、阪神の金本知憲選手が九〇四試合連続全試合フル出場の世界新記録達成の日、彼自身のなかの苦しく長い戦いを想起するとともに、顔の幅とあまり違わない太い首を見ながら筋肉の痛みについて思いをめぐらせた。

(18・4・10日)

○四月十四日～十五日、会社の同窓会をはしごした。年金生活者の生活の知恵である。第一日、新小岩会による桜花爛漫なるも、天守閣では手に冷たい風が吹き抜ける厳しい陽気の世界遺産姫路城見学旅行に参加した。関西の男性先輩三人、東京から女性九人、男性七人の総勢十九名。因みに女性の最若手が今年還暦を迎

えるので四十二年経過、まわりから一支店の退職者同窓会としては稀有だと驚かされている。

ハイランドビラ姫路の宴会広間でわたしは、後ろ向き歩きを浴衣姿で実践し、周囲の反応はと聞かれて、前に本誌で記述したが、人間はおろか散歩中などの犬猫までもが振り返る実態を答えた。若手男性M氏の物忘れの話にかまけて―宴会中、前述還暦の某女史が浴室内でストレッチ運動をする話の時、ストレッチ?の言葉を度忘れして、なにかの拍子に「アレして」と言ったのを引き取って―彼が「浴室の中でアレして?」言った話とともに大爆笑を取った。

第二日、三宮駅前の木曾路での神戸銀行松屋町支店OB会に、東京の新小岩支店に転勤後、四十二年ぶり初めて出席した。女性五人、男性わたしを含む十二人計十七人の会席に。男性最年長の先輩M氏がお酒に負けられて波乱の場面もあったが、わたしにとつてはみなさんのほとんどが、懐かしい人ばかりで、久しぶりで文字通り大阪、神戸弁の中に、どっぷり漬からせていただいた。嬉しかった。

お開き前に熟女方から「昔よく聞いた」として、急

に手拍子で「でかんしょ節」を歌うように指名されて、一番は歌ったものの、二番の歌詞が初日の「アレ」同様、度忘れしてどうしても出てこず、止めたことは、好きな民謡だけにかえすがえすも残念であった。

両日を通して、遠く過ぎ去った昔、同一職場で苦楽を共にした同志の、一期一会の重み、出会いのときめき、時空を越えての心と心の交流で生かされ、支えられていることのありがたさと感動を、改めて噛みしめたことだった。

撮っていたいただいた記念写真が待ち遠しい。時折アルバムを見て、自己内面のささやかな実りの日々を送りたいものだ。
(18・4・16日)

○孫達が遊びにきて六十数年ぶりに近所の児童公園で影踏み遊びをした。三・六歳の保育園へ行ってる男子は、最初は滑り台、ぶらんこなどで遊び廻っていたが、晴天の下、わたしが自分の幼稚園、小学一―二年ごろであったか?やっていたころの遊びをかすかに突然思いついて出でて、お互い陽光を受けての地面の影を踏みあい、踏み終えれば、即鬼になり相手の影を踏むべくそおつと近づくなりして、競い合う遊びだ。機関車、新幹線

モデルなどあふれかえる人工の世界とは無縁の世界。

すぐにわたしは孫に踏まれて如何に機敏性が欠如してきたかを、改めて思い知らされた。気持ちはそんなはずじゃないと思いついていけなかった。それにひきかえ、さっと逃げ切られてなかなか踏めなかった。ワッワ、キャッキヤの相手は時折ブレーキが効かず園内の植え込みの中に身体を突っ込んでいたが。

あとの二人は妻と上の女子（小六年）で、こちらは四葉のクローバー探しをしていたようだが、その昔同様、今日も見つからなかったようだ。

一方、長男夫婦は自宅でテレビを見ながら約一時間余つかの間の休養をとり、われわれ二人には嬉しいひとときであったが、正直疲れ切った。（18・5・3日）
○五月二十九日、足先のしびれは突然やってきた。三年前の勤務時代に手指先の（特に左手）しびれを経験したが、一週間位でいつか自然と消えた記憶がある。

今回は四月下旬頃から、やはり左手を中心に右手指先に、それは来ていたが指は曲がるし、握力も落ちなかったので普通の生活を展開しいつか直るだろうと、五月二十八日、毎年五〜六月に自分ですることになっている

庭木の選定作業で、刈り込み鋏でやや太めの錦木を、えらく堅いなと思いつながら自分の腹部前で無理やりにパッチンと合わせ切りをした時、左脇腹の中央筋肉部にキリーと、電気が走る痛みを感じたが、またもそのうちに直るだろうと甘く考えたのがいけなかった。

冒頭二十九日の早暁、床の中で両手指先から手の甲、手首の時計をはめる辺りに加え、両足先、両足先前面からふくらはぎとすねの筋肉部位まで、殻をかぶせたような感じのしびれが消えず、特に左足の膝関節の下から足首までだるく重い。手（特に左）の指先は高指、中指、ひとさし指、親指、小指の順に痛みを感じ、中の3本指先は曲がり難く、無理に曲げると手首上の筋肉部分に鈍い痛みで目が覚めた。更に加えて、あとから思い至ったのが、呼吸の都度左肋骨周辺の筋肉の炎症（肉離れ？による神経系統への影響＝しびれ）部分が刺激するのか心臓部分が痛いので怖くて寝ていられなかった。

約四十年來病気づらずの生活から足のしびれと心臓の痛みは初体験ショックで、本当にパニックだった。

考えが悲観的になった。四月下旬頃からのしびれの

原因が改めて重要に感じられて、直後は判らず妻と家庭医学辞典を見た結果、脳血栓か頸椎からくるものか判らず、先ず循環器内科、整形外科、神経内科（前記整形外科から紹介による）三先生の診察を受けることにした。

六月二十六日、一番心配した循環器内科担当医の診断結果は、負荷心電図に弱い不整脈が一部見られるものの、しびれと心臓周辺の痛みは関係ないとのことではあった。

今回骨身にしてみた反省点は①健康日常では考えもしなかった身体の特に筋肉は連動しているということ。体重六キロの猫（外地に出さない座敷猫なので）を毎朝夕玄関外石だたみ上で二脚椅子に座って、両膝上に座らせての両手指先での毛皮マッサージ作業や、大小便砂の清掃作業だけでも左横腹に連動するので、回復への安静維持は難しい。また整形の医師から直ちに筋肉トレーニングとストレッチ運動の中止を言われて、健康生活非日常への淋しさとリバウンド（体重増加）が怖かったが、泣く泣く一旦中止した。②健康意識過剰からくるやり過ぎがなかったか。③六回目の年男と

もなれば身体からの注意信号をもっとまじめに受け止めるべき。④何故か「渡鬼」の橋田寿賀子氏の人生には「のぼり坂」と「下り坂」があり、ほかに「まさか」の「坂」があるとの言葉を思い出した。

万一を想定して会計を担当している同窓会の現金預り金を銀行預金口座開設とした。自分で自信をもって築き上げてきた健康生活日常が崩れる時、わたしの前記を含む分担家事その他がストップし、拳句は妻と愛猫との生活バランスを崩すことになる。それは将来必ずやってくるその「崩れる日々」の前兆なのだろうか？

毎月楽しく参加していたボランティア活動も五月から休止中で仲間の皆さんに出会えないのが残念だ。

一ヶ月経過すると痺れ生活にも慣れてきた。六月十八日から禁酒。しびれが消えるまで当面スポーツクラブからの復路上り坂のみ妻の車で帰宅することにした。神経内科の結論は七月十九日で、今日も含めて手足のしびれはすっかり居着いていて、ウォーキング時、足がしびれてだるく重いが原因が判明するまでは、日にち薬で当面仲良く付き合っていくしかないのだからか。この暑いのにしびれには暖めるのがよいが、特に

手首あたりは冷房や冷風にあたるとつらい。激しい作業や運動をしないよう医師から命じられているが、それがどの程度なのかは結局は自分と身体との相談案件で、かたや減量は必須命題であり悩みの日々だ。

(18・6・28日)

○十九日、頸椎(首の部分の脊椎)の一部変形性脊椎症と椎間板ヘルニアによる脊柱管狭窄症との診断。一定間隔あるのが一部狭くなっているため、そこを通っている神経を刺激し(医師は「悪さをして」と表現)手足のしびれにでているとのこと。

二十一日、整形の医師から①転倒しないように②首を仰向けないように③腕の筋力が落ちるので肩回し(前後)運動をするように、との生活指導を受けた。また現状維持以上の結果しか得られない(しびれは完治しない)が、手術をするなら七〇歳台の出来るだけ若い時期にするようにとのことだった。

首も永年使用で疲労し劣化してきたのであろうか? 今日結果を聞きに来てくれた長男に、柏原の実家で中高生その昔、牛を使って土起こしから苗代づくり、代かきなどをしてきた頃から使ってきている首なのだ

と初めて話をした。

今まで気が付かなかった健常であることのありがたさを骨身にしみて思い知った。毎日の営みは迫ってくる。落ち込んでいても、悔やんでいてもしかたない。一病息災でより慎重に淡々と生活していきたい。

(18・7・22日)

○①初めての体調の変化がびっくりきたこと。物を縛る力が落ちたことを実感した。これまでは剪定した庭木や、回収業者に出す古新聞などの縛りは、きりりと空きなく縛り方上手と密かに自負してきたが、どうも今回の痺れで力を集中して縛れない。「ゆるふん」縛りは体力低下だと気になるがどうしようもない。

②今回の血液検査結果は、中性脂肪のみが今年の二月時比較プラス一〇〇増加して一九七を記録愕然とした。心配だった長年継続運動中止のリバウンドで、これまで何気なく保ってきた身体のバランスが崩れてきたのかと。先月末頃から下腹がたまにポッコリ出てきて、臓器が下がってきているのでは? と不安の毎日だ。

③痺れともう一点の苦しみは左横腹中央の肉離れであったが、やっと胸部から腹部中央(骨部と筋肉の接

点(帯)あたりへの鈍い痛みは治まり、最初に電気が走ったポイントを中心にピンポイントだが鈍い痛みがしつこく消えない。また何かの原因で痛み箇所が拡大しないかとの恐怖心も拭い切れない。かばいたい、休ませてやりたいが日常動作等でどうしても動く箇所なので、気長に粘り強く快復を待ちたい。改めて高齢時の肉離れの恐ろしさを実感した。

それにしても早朝ボランテア作業をした昨夏との落差はどうだ。花みずきはじめ気ままに伸び始めた自宅庭木の剪定もできない。首(頸椎)を支点に仰向くこと厳禁だから。寒い冬もやがてやって来る。

(18・8・12日)

○二十日、二十一日、兄弟会旅行(二泊三日)に身勝手ながら二日目夜から参加した。伊豆西海岸堂ヶ島蘭センター前のホテルA・Sへ直行し、関西から前日箱根で一泊した弟妹達七人と再会の喜びにひたつた。丁度、高校野球の最終日で、メンバーのなかに卒業生もいる福知山成美学園の大活躍を称えあった。

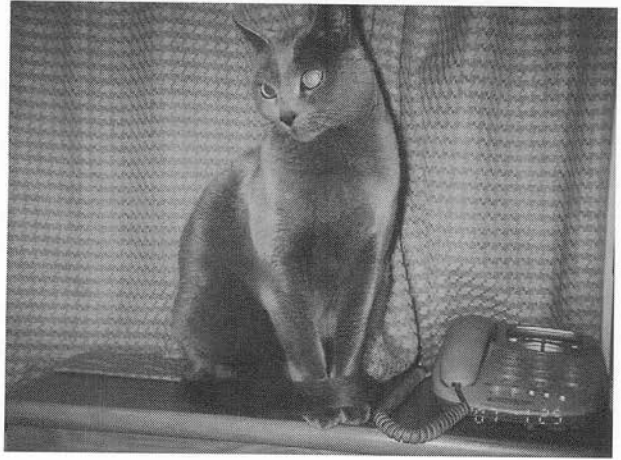
翌朝帰路、ホテルから修善寺駅まで送っていただいた借りきりの小型バス内で、少年、少女時代に還り、

稲作の話をして懐かしかった。田植え前の代田作りで植え付けやすくする牛を使つての道具で「マンガ」、しつかりと根ついた稲の間の除草をする「ゴロ廻し機」の話。刈り取った稲穂束の乾燥で「タツマチ？」と「イナキ」に父が架けるそばへ運び、イナキの上で片足をかけ、両手で受け止める父に下から放り上げた日々の思い出、汗まみれ中で、むせ返る稲穂束の独特の匂いと母の顔を生々しく思い出した。六夫婦十二人。兄弟はいい。

(18・8・25日)

○生後八年目の雄の愛猫ケイスケは几帳面できれいだ。大小便排泄砂を排除すると、待つていたようにいつの間にかしている。特に大便秘時は砂をきれいにかけている。この行為を褒めてやると、従順なロシアンブルー種の性癖にもよるのだろうか、さらにしつかりとかけている。毎日朝昼晩最低三回以上四、五回の作業。

習慣性面から毎朝ウォーキング帰りの六時過ぎに玄関マットの上で座って待つている。金櫛での毛すきが大好きだ。玄関外の石畳の上に寝かせて全身をすいているが、石の上が冷たく気持ちが良いのだろうか、目



をつむって眠り出す。

同様に毎夕方、外へ抱いて出て、し道路の角に二脚椅子をおいて座り、両膝の上に乗らせると三十分から一時間でも、道を行く自動車を見るのが好きだ。外へ

は一切出さないので彼にもストレッチ解消になるのか。五時半前後になると、鼻先でわたしの足を押しして外出をせがむ。蚊がいない限り腰が痛くなるまで見せてやる。

痛み病んでみて夏の猛暑の中でも、ケイスケも必死で毎日を生きているのだとの思いを新たにしたい。これ

まで健常時には考えもしなかったのに。快適な環境、精神状況にしてやりたい。激しい肉離れ時にも我慢しながら、こうした体を折り曲げてのこまめな行動をしたことが、わたし自身の患部をかばい過ぎずに、適度に身体を苦痛環境に慣らしていったことが、快方に向かわせてくれたのだとの感謝の思いとともに、人体とは不思議なもの、また会話の出来ない猫にも支えられて生きているのだと実感している昨今である。日課の午後1時間前後の昼寝時、いつの間にか、わたしの横腹を枕にして寝ている。可愛い奴だ。(18・9・29日)

○医者の指示もあり休んでいたボランティア作業に復帰(十四日、二十九日)した。肉離れは九月末で完治。左足が歩くと少し重くだるいのと、左手の中指、高指中心に痺れは相変わらずだが、下草刈(十四日)と、急斜面に群生している不要樹林の間伐作業(二十九日)で、痺れが引いた右手、右足が使えるので参加出来てよかった。

作業後お茶の時間に代表の方からの話で、本会のメンバー構成は若手の参入がストップ状態で、高齢化が進むなか、作業を容易にするための用具の電化につい

て、市の担当課に折衝したいとのこと。

現在の草刈鎌を電動丸鋸鎌に、トンガ類を電自動耕運機に、鋸を電動鋸にと希望は大きいが、他団体との公平面もあり実現まで難しそうだ。里山維持管理の目標に、作業用具の電化等の促進をどう図るかが、今後と言うより目下の課題だ。

また若年層の補充がないまま、加齢と共に足腰の筋肉と、握力の弱体化が進む高齢者が、念願の電動作業具を扱う場合、安全面の徹底管理も重要課題だと思う。

(18・10・30日)

○今日、健診結果データをいただき、気にしていた中性脂肪測定値は一〇〇で、問題なしとのこと。尿酸値が〇・二高い(七・七)のを除いて、他はオール基準値内の測定値で、問題点なしとのこと。医師から今年初めて検査したよ、と言われた栄養面の検査結果(アルブミン四・二)も良いとのこと、改めて妻にお礼を言った。減量面も今月に入り、七〇K台を切り出して本日は六九・八五Kで、体重七〇Kへのリバウンドが怖くて、油断は出来ないが二重に嬉しい日であった。

(18・11・28日)

○師走。今年に入って三足目の靴をまもなく履きつづすことに。D社製の四千円弱のもので、わたしの場合毎回踵でなくつま先部に先ず穴が開く。これは毎朝の後ろ向き歩きをしているのと、腰痛予防運動(両手から両足先を三十五度から二十五度角に斜めに倒して、両足を交差しながら前後進を繰り返す一〇〇回。両手の支えは現在児童公園の滑り台、登り階段側の両手すりの最下部を利用)をしていて、体重をかけて砂地の砂をつま先で蹴るように掻き飛ばすからだ。

靴の重量の関係もあるが、後ろ歩き用に磨耗しにくいつま先にも工夫された靴の出現に期待したいが無理な話か? 靴裏で砂地の穴ぼこを均すのも楽しい。

今年に入って新しいスクラップブックを一冊増やした。朝日新聞で四月一日から再掲された「折々のうた」の毎日一首ずつ貼り付け作業。丁度四月三十日付けの丹波新聞「うたの小箱」に、崇広幼稚園からの同窓である春日町の足立洋子さんの短歌が掲載されたのを機に、前記「折々のうた」の中に、「うたの小箱」を日付け順に交ぜ入れ貼り付けて楽しませていただいている。

大岡、由良、大島先生の鑑賞、解説記事から、この一首の背景や、関連知識などを吸収させていただき、目を啓かせていただく一日一日が楽しい。

六回目の年男年に病んで（幸い内臓疾患でなかったが）みて、他への思いやりについて、実行する気持ちの方が更に深まった。ケイスケの大小便砂清掃から、布団干し、家内外の清掃など日常の細かい作業、動作で絶えず身体を折り曲げ動かすことがいい運動になる。ささやかであっても人や猫の快適な生活環境づくりをすることが、相乗効果で自分の健康にもつながるように改めて思う。

二十四日、長年必見しつづけている高校駅伝も終わり、二十五日から今日（彼の誕生日）まで四日連続のNHKラジオの「なんとたって石原裕次郎リクエスト特集」も「北の旅人」の曲を最後に終わった。わたしと同年（犬年）なんだと思いつつながら、なぜか今年を象徴する字「命」が浮かんだ。

（18・12・28日）

○今月も能率手帳ライツに記号式日記（行動記録）を記録し出したら、はや三週目に入った。医師から首まわし運動と腕立て伏せ運動は厳禁されたが、**㊦****㊧****㊨****㊩**

㊪**㊫**で、他の作業は行を変えて具体的に一F板の間清掃、私道清掃、二F全室清掃、金木庫ハナミズキ剪定などと記入している。**㊬**は早朝ウォーキング、**㊭**は両足を合わせる腰痛予防運動、**㊮**は同じく児童公園で腕回し運動、**㊯**はスポーツジム行き、**㊰**は青竹踏み五分間、**㊱**は椅子を使つての腰をすくつと立つて、座つての上下運動一〇〇回、**㊲**は新聞スクラップ作業である。

今日も大相撲を見ながら**㊳**を終えると、上記手帳の翌日欄に予定記号を記入することにして、最低の必須目標を掲げて、以下毎日実行、チェック、翌日予定の記入励行を繰り返して、必実行を期している。

今日は年賀葉書の抽籤日で、早速調べたら三等お年玉切手シートが一枚当たっていた。一六九枚出状し、頂いたのは一六三枚。妻は二十枚出して同上シートが二枚当籤していた。なんとなく不条理と、籤運の弱さを痛感した。

（19・1・14日）

クリスマスローズの蕾紅清し

19年1月28日記

丹波市古代の夢路の旅

日置孝彦

(氷上町)

丹波国は古い文献史料が極めて少ない事で知られている。その最大の原因は、戦国時代、武将明智光秀の丹波攻めが行われた事にある。光秀は越前の朝倉義景から戦国覇者織田信長の家臣になった人。当時、神社・仏閣等が反勢力の対象物と見なされて焼討ちによる焼失によって、先人達が営々と築き上げてきた文化財は、大打撃を蒙ったのである。丹波攻めの張本人は総大将織田信長であって、明智光秀は露払いの先陣役だったために直接、悪人呼ばわりされる事になった悲運の人物である。事実、貴重な文献史料は灰燼に帰し、現存していない。

そこで丹波国誕生の経緯を見る事にしよう。丹波国は、現在の兵庫県北東部、京都府北西部にまたがった地域、奈良時代の和銅六年（七一三）丹後国を分割し

て誕生した事が知られるのである。『和名抄』（わみょうしょう）には、何鹿・桑田・船井・天田・氷上・多紀など六郡が記されている。延喜式の等級は上国に位置付けられている。国府は桑田郡（現在の京都府亀岡市）に設置され、国分寺、国分尼寺が創建されている。平安時代末期には、国府が船井郡（現在の京都府八木町）に移転している。丹波国が六郡によって構成されている事の典拠は、『和名抄』であることが知られる。では『和名抄』とは一体どんな書物なのだろうかという疑問が湧いてくるので調べる事にした。

『和名抄』は、正しくは『和名類聚抄』（わみょうるいじゅうしょう）という。日本最古の意義分類体で記述した漢和辞典であるといわれているが、諸事万般の事が記述されているので百科事典とも言われている。『和名類聚抄』は、第六〇代醍醐天皇の皇女、勤子内親王の依頼により源順（みなもとのしたごう）が撰録したといわれている。成立年代は、平安時代の承平年間（九三一―九三八）とされている。日本最古の意義分類体と言われるように、意義によって部類をたて漢語を掲出して漢文による注記をほどこし、和訓を万葉

仮名で付記する。伝本には十卷本系と二十卷本系とがある。十卷本は天・人（衣食・調度を含む）・動植物二十四部一二八門に分類している。二十卷本は歳時・音楽・職官・国郡・香葉などを加えた三十二部二四九門からなる。二十卷本は、十卷本より八部一二一門分類が多い事がわかる。

ここで『和名抄』という書物の成り立ちが理解されてくる。それは書物の構成、分類等による特質や特殊性によるものである事がわかる。『和名抄』は、平安時代の前期に撰者の源順が七年の歳月をかけてまとめたものである。特に注意すべきは、源順という撰者その人が豊かな発想の持ち主でもあり、知恵者であった事は申すまでもなく知識人であったと思われる。千年の昔、平安時代には複写機などはなく、人から人へ、書物を写し書きするという手写方法しかなかった。現在、十卷本系と二十卷本系という写本が伝わっている。ここまでにはわかった事と言えば、丹波国が誕生したのは、第四三代元明天皇が藤原京から平城京に遷都した和銅三年（七一〇）三月、奈良時代が開幕して三年後の和銅六年であった。丹波一国は、六郡から構成さ

れていることがわかった。その六郡の一つであった氷上郡が丹波市の源泉（ルーツ）である。不思議な事は、丹波国が誕生する八年前の慶雲二年（七〇五）に法道仙人が白毫寺を創建したと寺伝は伝えていいる。白毫寺が創建されて三十六年後、奈良時代の第四五代聖武天皇の治世に国分寺建立の詔が天平十三年（七四二）二月十四日に発せられている。国分僧寺国分尼寺の建立を命じた聖武天皇の詔である。その詔の付記の願文に聖武天皇の真意が示されている。願文には、国家護持、先帝の追善、皇族や貴族が死後彼岸に達すること。藤原不比等および県犬養三千代（あがたいぬかいのみちよ）を範として、その子孫が固く君臣の礼を守ることなどが盛り込まれている。いにしえの古代国家社会では、仏教による日本の国造りをする事によって国家を支える人々を仏法で救済することであった。

知られざる白毫寺の創建時代の歴史的背景を見逃すことは出来ない（本誌第37号掲載の拙稿「時空ロマン・白毫寺」）。このように悠久の時を経て丹波市が生まれた事を理解して頂きながら、丹波市の古代の情緒・情景を想像し、堪能して頂ければ本望である。

トルコ感動の旅

足立 東一郎 (青垣町)

トルコについては、“トロイの木馬”ぐらいしか思い浮かばない程度の認識であった。丁度一年前の十月、そのトルコへ仲間八人とツアーで訪れた。

トルコは、世界でも最も親日的な国の一つとのこと。明治以来、日本と深い関係がある。一八九〇年(明治二十三年)九月、明治天皇へのトルコの使節団が、帰路、熊野灘沖で台風に遭い座礁。特使を含む多くのトルコ人が亡くなった。その際、生き残った人たちを地元住民が手厚く救援、明治政府は生存者を母国トルコまで送り届けたとのこと。

そして、当時の日本政府の好意をトルコ政府は忘れていなかった。一九八五年、イラン・イラク戦争の時、

手だてのなかった日本政府に代わり、砲火の中、トルコ政府は自国の飛行機でテヘラン空港からイランに住んでいた日本人を救出、成田まで運んだ。

その間の経緯を元駐日トルコ大使が語っているそうである。「かつての事故の時の日本人と日本政府との献身的な救助活動をトルコの人たちは忘れていないし、自分も歴史の教科書で学んだ。今の日本人が知らないだけで、トルコの人たちは子供でも知っている。テヘランで困っている日本人を助けようとトルコ航空機が飛んだのです」と。この話は、ツアー現地バスガイドから紹介された。自分の不明を恥じたが、トルコへの親近感が生まれてきたことは確かだ。

さて、ツアーの話である。我々は旅費節約のため乗継ぎ便を利用した。途中、私には全く馴染みのない国ウズベキスタンに降り立った。タシケント空港だ。国際空港だが、実に閑散としていて待合室はイスが並んでいるだけ。広告の類たぐいもアナウンスもない。降り立った時からカメラの撮影は一切ダメと厳しく説明された。二時間ばかりの滞在であったが得難い経験をした。

観光の第一歩はギリシャ神話の世界に登場するトロ

イの遺跡だ。旅立つ前から、「トロイの木馬」の出てくる所とはどのようなものかと好奇心を募らせてきたのだが、遺跡に着いて、まず目に飛び込んできたのは、木馬の復元像。高さ五メートルほどの馬を象^{かた}どった二層からなる木製の建築物だ。正直、トロイの兵士達が、こんなものにごまかされて十年にもわたる戦争に破れたとは信じられない。観光用の呼び物と納得。なにしろ紀元前約二五〇〇年頃の話である。誰も真偽の程は分からない。遺跡は荒らされていて、現在も発掘調査中である。

期待が大きかった分、がっかりだった。すべては神話を信じ、黄金の財宝を手にすることに夢中であった発掘者シュリーマンのせいか（シュリーマンが祖国ドイツに持ち出した秘宝は、現在、ロシアのサンクトペテルブルクのエルミタージュ美術館に所蔵とのこと）。日本の二倍の国土を有するトルコ。ツアー移動はバスが中心。一日平均五〇〇km弱、時間にすると六、七時間の走行。実に長い。途中、土産、昼食、トイレなどの休憩はある。バスは高速でオリブ畑、綿畑、放牧地などが延々と連なる高原をひたすら走り続ける。

単調だ。土地の広大さのみが目には焼きついた。この雄大な光景こそがトルコ旅行の醍醐味のひとつと語る人もいるようだ。

観光三日目、なだらかな稜線を描きながら小高い丘が両側から迫る谷間にその遺跡はあった。街全体が緩やかな下り坂に沿って、かつての海岸に向かって成り立っている。石畳の大通りの両側には大理石の円柱が整然と並んでいる。辺りには倒れた遺跡の大理石がいくつも散在。建築物の数々が修復されながら残されている。エフェス古代都市遺跡だ。

神殿、浴場、集会所、大劇場、図書館など公共建築物の多さに驚く。下水道設備や水洗式公衆トイレも存在する。当時の高度な技術の証だ。なかでも二世紀初期完成のセルスス図書館は、世界で最も精巧に修復された建造物の一つとのこと。二階建ての壮大な建物にはびっくりりだ。蔵書数も一万冊を超えたと伝えられ、当時の教養文化の高さに驚く。今でもコンサート会場として使用されるという三万人収容規模の大劇場の立派さにも感動する。

高い所から遺跡を眺めると、古代都市エフェスのか



セルスス図書館の前にて

つての栄光と繁栄が目に浮かぶように思えた。聖母マリアが晩年をここで過ごし、クレオパトラがここで滞在したとの伝説も納得できる。

今回の旅では、この遺跡が一番強く印象に残った。ここで自作の一首。

・都市遺跡エフェスに残る石畳

クレオパトラが馬車の轍わだちか

いくつもの世界遺産を見、アンカラから旅行列車にも乗り、イスタンブールの夜、妖艶なベリイダンスに魅せられ、記念のトルコ絨毯も手に入れた。トルコ感動の旅だった。時あたかも、トルコはラマダーン（断食）月だった。愚妻も一首読みました。

・旅にきてアザーンの声に目覚めれば

東方しろき月の沈黙

今、トルコはイスラム教社会で唯一、政教分離の国家として、EU加盟への実現が注目されている。

アジアとヨーロッパの懸け橋として特別な位置を占めるトルコ。EU加盟が、イスラム教社会とキリスト教社会の懸け橋として、世界平和のきっかけになっていけば、個人的には素晴らしいと思う。

ドレスデンの思い出

生田清弘

(柏原町)

ドレスデンを訪れて

今から一三年前の一九九四(平成六)年一〇月、東西ドイツ統一後のドイツを訪れた。一九九〇年による初めての総選挙が行われてから二度目の選挙の最中だった。コール首相率いる与党と野党の速報得票率差は〇・三%、また議席は与党の三四一に対し野党は三三一でその差はわずか一〇議席で、与党の凋落と野党の躍進という結果をもたらした。

ドイツ国民悲願の統一だったが、前回選挙の「増税なき統一」の公約を果たせず、東西の地域格差の解消は依然、大きな課題であるばかりでなく、西ドイツの

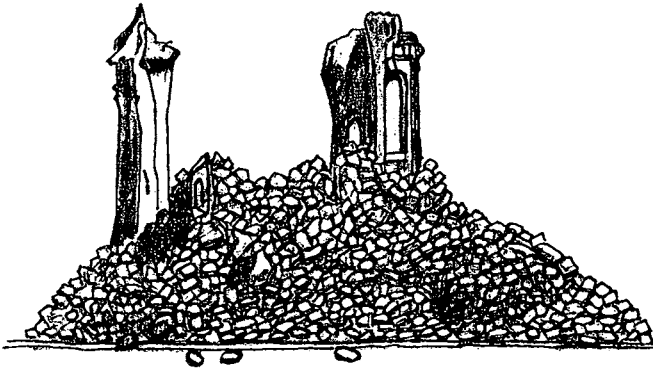
経済の行方にも懸念を残すこととなり、多くの人々の不満が選挙結果に反映したと見る向きが多いようだ。事実、私達の旅行中にも各所でこのような声を耳にしたことを思い出している。

ドレスデンは、ドイツ東部に位置し、ポーランドとチェコに接するザクセン地方の首都としてエルベ川沿いに発達した都市。君主の居城のある都として、歴史的な宮殿をはじめ見るべき建造物も多く、またヨーロッパ各地の美術品などが収集されたことから、「エルベのフィレンツェ」と呼ばれ芸術の都として有名になった。

第二次世界大戦の末期、一九四五(昭和二〇)年二月一三日から一四日にかけての英・米連合軍の大空襲により、ドレスデンの街全体が一夜にして壊滅し廃墟と化した。この年は東京大空襲(三月一〇日)や、広島に原爆投下(八月六日)、長崎に原爆投下(八月九日)のあった忘れることの出来ない年である。

ドレスデンの空爆による犠牲者は三五、〇〇〇人以

上、数々の建物の被害は二五、〇〇〇戸に及び、その中にはツヴィンガー宮殿、レジデンツ宮殿、国立歌劇場、聖母教会などの著名な歴史的建造物も含まれている。



1945年、空爆により崩壊した聖母教会（イメージ）

私たちがドレスデンを訪れたのは、この悲劇からおよそ五〇年の歳月が流れていて、市街を見る限りでは殆ど建造物は復旧しているようであった。その裏には灰の中から立ち上がった市民をはじめ、多くの人々の並々ならぬ努力があったに違いない。

その一方では、聖母教会のように無惨な残骸や、傍らには無数の瓦礫が高く積み上げられ、全くの手つかずの状態で放置されているものもあった。

一九九五（平成七）年二月一三日夕、ドレスデン大空襲から満五〇周年を記念して聖母教会跡で慰霊祭が行われた。当時のヘルツォーク・ドイツ大統領は演説の中で次のように語っている。

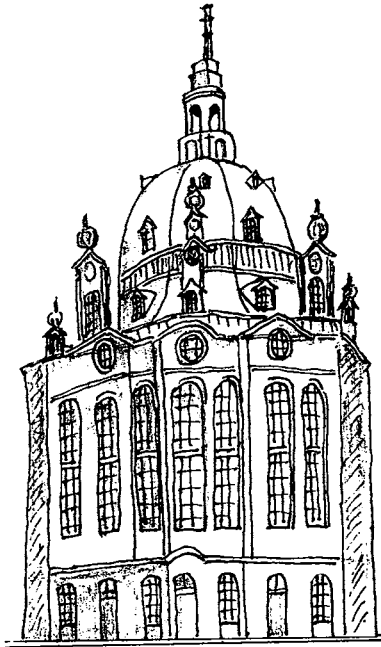
——空襲で多数の民間人が犠牲になったからと言って何人もナチスの犯罪を帳消しにはできない。われわれドイツ人は、自らの戦争責任を矮小化しようとはしない。肝心なのは、われわれが歴史から十分学んだかどうかである。戦争という恐怖が再来しないために、あらゆる努力を果たさねばならず、五〇周年記念日はその意味で全世界へ向けたメッセージである。——

（朝日新聞・平成七年二月一四日）

聖母教会の復旧作業は漸く一九九四年に至り着手された。作業は頗る難工事だった。壊れた瓦礫の山は何と一四メートル、破片の数は一〇万個以上という。その一つ一つを取り出し出来る限り再利用し、足らずは

新たにつくるといふもの。「世界最大のパズル」と呼ばれる所以である。着工から一〇年をかけて、この気の遠くなるような難事業を成し遂げたドイツ人の不屈のドイツ魂というか、執念といおうか、その粘り強さに感服した。総工費は一億三〇〇〇万ユーロ（約二〇〇億円）、その七〇パーセント以上が世界各国からの募金による支援といい、空爆に加わったイギリス兵士の息子たちがつくった黄金の十字架が、「反戦」の象徴としてドーム上で光を放っている。

このドレスデン空爆は、一九三七年にドイツ軍が当



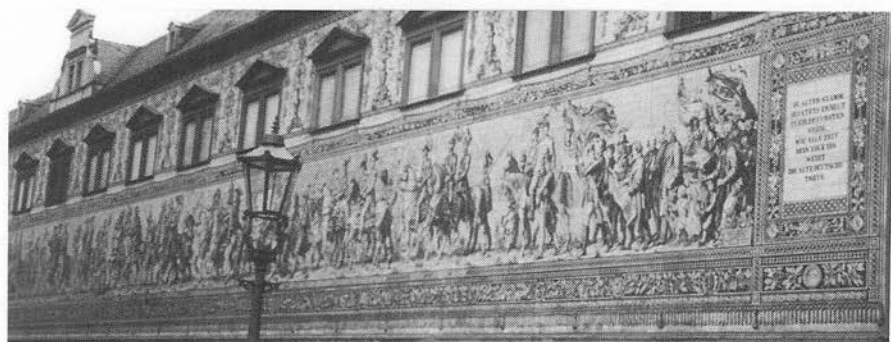
2005年に復旧した聖母教会
(イメージ)

時内戦中のスペインのゲルニカ（ピカソの絵画で有名）を爆撃したことや、一九四五年のアメリカ軍の広島・長崎への原爆投下とともに、二〇世紀における非人道的な無差別爆撃といわれるものだ。二〇〇五（平成一七）年一〇月三〇日、シュレーダー首相やイギリス女王、アメリカ政府要人らが出席して聖母教会の落成式典が行われ新たな決意を込めて世界平和を訴えた。

○

劇場広場は一九世紀後半に建てられたゼンパー・オペラハウス（ドレスデン国立歌劇場）前の広場で、ツヴィンガー宮殿や、宮廷教会、レジデンツ宮殿などの歴史的建物に囲まれた観光の中心になっている。歌劇場は、風格のある堂々とした建物で、夜間、光に包まれた姿は印象的。宮廷教会の佇まいも見事で、アウグスト一世により計画されたカトリック教会。八五メートルの高い塔や、外壁の各所に見られる聖人立像も人目を惹き、後期バロック建築の傑作という。

レジデンツ宮殿は、歴代のザクセン君主の居城だった。代を重ねるにつれ、何度も増・改築が行われ、ゴシック、ルネサンス、バロックなどの各様式が合体し



大壁画「君主の行列」

た建物になっている。

この宮殿も被爆して復旧中だったが、外壁に設けられた「君主の行列」という大壁画は奇跡的に難を逃れ無傷だったという。ザクセン地方の歴代君主の騎馬姿を描いたもので、長さ一〇二メートル、高さ八メートルの大きなもので、マイセン磁器のタイルで作られ、使用したタイルの数は二七、〇〇〇枚、一九世紀から二〇世紀初めに作られた。よくも爆撃の被害から逃れたものだ

という驚きと、君主の騎馬姿の数々がマイセン・タイルという豪華さに感動し、暫く立ち去り難かった。

ツヴィンガー宮殿は、アウグスト一世の離宮で、ドイツ・バロック様式を代表する建物。大空襲で壊滅したが、今なお、昔のバロック都市の再現をめざし工事が行われていた。王冠の門をくぐると中庭に出る。宮殿はこの中庭を囲む形に建物が建っている。正面部分の建物は、古典巨匠絵画館と歴史博物館に当てられていたが、改修工事中は他の建物に移されているようで、古典絵画はアルベルティヌムに、歴史博物館の展示物はレジデンツ宮殿に展示中とのこと。グリューネス・ゲヴェルベ（緑の丸天井）には、ザクセン選帝侯や国王の財宝を陳列している。金や宝石をちりばめたアクセサリーや貴金属工芸品、室内装飾品類の数々が並べられ、その展示品の多さと豪華さに驚く。

エルペ川沿いに約一キロメートルの長さに広がる高台の要塞跡地を利用した「ブリュールのテラス」と呼ぶ見晴らしのよい場所がある。一八世紀に、ブリュール伯爵の庭園が造られたことからこの名がついたといわれ、「ヨーロッパのバルコニー」とも呼ばれる。散

歩がてら夕方歩いてみたが、要塞だった所だけに見通しのよい、眺めの素晴らしい場所、川を渡る心地よい風が頬をかすめ、対岸には今までと違って旧市街ならぬ対照的なゆつたりした風景が展開して気持を落ち着かせてくれる。正に癒しの一時だった。

映画「ドレスデン、運命の日」を 観賞して

今年二〇〇七（平成一九）年五月、日比谷で上映中の映画「ドレスデン、運命の日」を観賞した。このことが、かつて訪れたドレスデンを思い出し、今回の起稿のきっかけとなった。

この映画は「エルベのフィレンツェ」と称えられ、ドイツを代表する文化と芸術の古都、平和に満ちたドレスデンが、一夜にして激しい空爆により壊滅した史実を踏まえ、戦後六〇年を経た今、はじめて真正面から映画化に取り組んだものである。当時の多くの体験者をして、「この映画は、正にドレスデンの悲劇の再現だ」といわしめた程迫真の成果を収めた。特に空襲

の凄まじさ、一面火の海と化した炎とともに、猛烈な爆風の中、一般市民の逃げまどう様子をとらえたシーンは恐怖も極限に達し、立ち止まり蹲る人々、祈りを捧げる人もいる。容赦なく爆撃は続く。とても正視できざる光景ではない。胸を締めつけるような痛みが走った。

○

映画のストーリーは、アンナの父が経営する病院の外科部長（アレクサンダー）、気丈な看護士（アンナ）と敵軍のパイロット（ロバート）の三人を中心に進行する。はじめは、敵であるロバートに対し憎しみをもつアンナであったが、傷の治療をしたり、逃げ場のない彼を庇ったりするうちに二人の中は親密になっていく。一方、アレクサンダーとの仲は、父も認めていたが、アンナの気持がロバートへ傾斜するに従い隙間風が吹くようになる。

そうして二月二日になり、アンナとアレクサンダーの婚約式が行われた。アンナはロバートとの関係を誰にも伝えないまま式に臨んだ。式のただ中、ロバートが突然姿を現わし、アンナに、父が折々に溜め込んだ

モルヒネを持ち出し国外逃亡を企てていることを告げる。アンナは大変驚き、父の行為は患者を裏切るものだとして反発する。折角のアンナとアレクサンダーを思う親心だったが逆効果となった。父はロバートを秘密警察に引き渡そうとし、アンナを用意した車に押し込み、二人の仲を引き裂こうとするが、この時ドレスデン上空には爆撃機の編隊が近づいていた。

○

この映画の製作者は、多くの尊い人命が犠牲になったこの戦いをドイツ、イギリスの何れにも片寄らず、あくまで中立の立場で映像化に挑戦したことを強調している。アンナとロバートの関係には、ドイツとイギリス双方の視点から重要なテーマである「和解」のメッセージが込められ、もう一つのテーマである「反戦」については前述したように、聖母教会を忘れることができない。映画のエピローグでの再建した堂々たる聖母教会の姿こそ「反戦」を象徴するものだ。敢えて木っ端微塵のイメージを払拭して、新しい聖母教会の姿を登場させ、戦後六〇年を契機に反戦、平和の意義を問ひかけ、希望に満ちたエンディングを演出した作者の

意図に感銘し、改めて世界の平和を祈る気持で胸が一杯になった。

最後にこの映画の監督、ローランド・ズゾ・リヒター氏の言葉を紹介して結びとする。

「戦争から人間が学べることはあるとすれば、それはただ一つ——いかに戦争が無意味であるかということだけなのです」と。(ドレスデン、運命の日・東宝(株)出版より)

(二〇〇七年・記)



柏原日赤、分娩取扱い
中止、六割は柏原病院

柏原赤十字病院（柏原日赤）では、二月末に分娩の取扱いを中止。三月末で、産科の診療も中止となった。分娩予定だった七二人全員は他病院へ、残り四割が丹波市以外へ。医療施設の分娩休止は、全国で相次いでいるが、その背景は、研修医制度の変更で地方の医師不足が生じたこと、

加えて分娩時の事故で訴訟が増えているため、産科医のなり手が減っているため。実際過去三年足らずに県下で二二病院が産科を休止した。日本は、妊産婦と新生児の死亡率の低さにおいて世界トップクラスになったが、それでもお産は絶対安全なものではなく、万一に備えて麻酔、外科、内科など他科の医師やスタッフ

がそろっている総合病院の分娩取りやめは、妊産婦に甚大なる不安をもたらす。受け皿になる県立柏原の産科医も三名で、増える予定はない。篠山病院でも産科医が一人になってしまった。このままでは、地元でのお産ができなくなってしまうかもしれないと案じられるほど、丹波地域の産科は危機的状况にある。

（平19・3・29付）

「柏原病院の小児科を守る会」が発足

県立柏原病院では、二人の医師で小児科が運営されているが、過重労働で存続の危機に立たされている。子育て中の母親たち有志は、「医師の過重労働を軽減するために、患者側も注意する」という署名用紙を作成し、県知事あてに、同病院へ小児科の医師招

へいを求める内容の署名活動を始めた。

（平19・4・26付）

地域医療の崩壊の危機を訴え市民講座を開く

篠山市医師会と市の共催で、このたび開講された「最先端の医療知識を学ぶ」市民健康大学講座で柏原病院上田副院長は、医師不足により地域医療の崩壊が急激にすすんでいる現状を受講者に話した。調査では県内の三割の産科医が

「十年以内に分娩をやめる」と答えている危機的な状況が報告され、神戸などへ流れる患者たちも、またそこでいっばいになり溢れていく様子がみられるという。市民としても適正な意見を持ち、自治体への働きかけをして欲しいと訴えた。（平19・8・30付）

丹波市が緊急対策で「地域医療課」を新設

丹波市は、九月一日付けで「地域医療課」を新設。専従の職員を二名置く。地域医療の充実をはかるため、「地域医療緊急対策事業基金」設置の条例案を市議会に提案した。（平19・9・5付）

県立柏原病院の脳神経外科、診療を休止

県立柏原病院は一〇月一日から、脳神経外科について新規の入院患者の受け入れと手術を休止する。現在二人の医師が二人とも年内で転勤となり後任の補充がないため。同病院は丹波地域の頭部救急疾患治療の柱だったが、大学医局の脳神経外科医師集約化の方針によるもの。（平19・9・16付）

■郷里の知人が書いた本

清水雅子著

『極楽の余り風』第三集

丹波新聞社発行／定価1300円

丹波新聞に連載中の随筆「やすらぎ」から抜粋の三冊目の本。二〇〇三年二月―二〇〇七年三月までの四年間を、魅力溢れる見出し「祖父のラブレター」「時計草のリース」「遺品」「芽起しの雨」と年毎の四章立てとし、百三十二編のどこを開いて読もうかと嬉しくなってしまうほど、綺羅星のようなタイトルが並ぶ、含み多いエッセイ集である。

作者は週二回の連載を二十八年続けておられる。言うは簡単、書くも僅かの字数だが、週に二回の連載はアンテナをピンと立てて意識を蜘蛛の巣のように張り巡らせ、四方八方へ目を配り、いつでも取り出せるポケットを幾つも持たねばなるまい。締め切りに追われるそんな日々を過

ごしていると、書かなければとの気負いで堅苦しい文章になると思うのだが、一編一編どれもすーっと舐を通り抜ける風のように軽やかである。春には長閑さを、夏は涼やかに、秋の爽やかさ、冬にはほっこり。春夏秋冬の季節の移ろいを軸に、家族模様・忘れていた懐かしい言葉・社会情勢・面白い風俗風習・趣味や友人等々の話題を、旺盛な好奇心とこころの綾をからませながら、日常の覗き穴から慈しみの眼差しで見つめた珠玉の数々である。

岐阜在住の作者が丹波柏原の実家へ帰ったある日、母親と青垣へ出かけ「細見綾子句碑」や道の駅で晩冬の日を楽しんだ里帰りの様子が第二章「時計草のリース」の中の「親と過ごす時間」で具体的に滋味深い言葉で綴られている。

本を読み続けていくと四章「芽起しの雨」最後近くに「せんぐり」の標題でやはり早春の青垣を訪れた文がある。この三年の間に「近畿豊岡自動車道」が開通したことが解り

「青垣道の駅丹波布伝承館」の賑わいも読み取れる。開通したばかりの高速道路はトンネルがいっぱいらしい。反対方向に向かってしまった帰路で、お母さんに「まあ、こんなにせんぐりせんぐりトンネルがあるのはおかしいないけ？ あんた反対に走ってやわね」と眩かれると、紙面にはたちまち柔らかな方言が飛び交う丹波が拡がり、愉しく嬉しくなる。

このように日常の繰り返しも作者のアンテナに触れると、季節の歳時記になり、国語辞典になり、興味をそその地誌になる。

イラク戦争で死亡した七百名を越える兵士達と福知山線脱線事故の犠牲者百七名を、一くくりの数ではなく一人一人の名前ある人として背後の人生を偲ぼうと書かれるように、時事や社会批判の編々は、筋の通った鋭い目線と怒りに満ちた筆致で、読者を共通の思いに誘う。

懐かしい日溜まりの匂いがどの頁からも立ち上った。(原合洋美)

■郷里について書かれた本

松本健一著

『評伝 斎藤隆夫』

—孤高のバトリオット—

岩波書店 発行/定価1200円

今は豊岡市に併合された出石郡出石町であるが、藩校「弘道館」に基づき教育風土は、帝大初代総長、加藤弘之をはじめ数々の人材を東京へ送り出した。二・二六事件直後の「肅軍演説」、そして「支那事変処理に関する質問演説」で知られる斎藤隆夫もその一人である。

七十年経った今、彼の名は「肅軍演説の斎藤隆夫」と呼ばれるばかりで、内容を検討されることもほとんどない。大東亜戦争当時の「第二の開国」がどのように開かれ歪んでいったかを『日本の失敗』（東洋経済新報社）で物語り、そこでの斎藤の位置づけも試みた著者が、斎藤の精神や政治哲学がどのように形成された

かを調べたのが、この大作である。

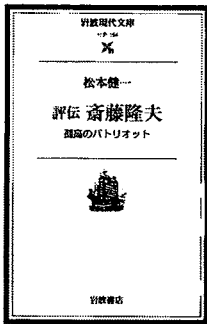
著者が斎藤の存在を思い起こしたのは、国民の人気を集めて宰相となったものの、優柔不断でシナ事変の泥沼へ入り込んでいった近衛文麿の姿を、その孫、細川護国首相の登場に見たからである。斎藤が衆議院から追われることになる昭和十五年の「支那事変処理に関する質問演説」の矛先は、米内内閣だけでなく、この事変を引き起こしながら処理できなかった第一次近衛内閣に厳しく向けられていた。原「平民」首相でさえ「時期尚早」と反対してきた普通法は、斎藤たちの熱心な推進で、ようやく昭和三年に施行されたが、但馬五郡と丹波二郡を合わせた兵庫五

区が彼の選挙区となるので氷上郡関係者も度々登場する。

この選挙でトップ当選するのは斎藤（民政党）であるが、第二位は田艇吉の長男で同じく民政党の田昌（でん・しょう、一八七八—一九四三）であった。衆議院から除名された後、昭和十七年の選挙で大政翼賛会非推薦の斎藤は、兵庫五区最高点で当選するが、葛野村出身の佐々井一晁も非推薦で二位となった。全国でも珍しい選挙区だ。

戦後の佐々井は不遇であったが、奥むめを主婦連会長の夫君として知られている。除名問題では斎藤を庇った芦田均が戦後、社会党と連立して政権を獲得した際、野党の自由党に政権を譲るのが憲政の常道と説く斎藤は芦田と分かれて民主党を離脱し、「政権参加のみを目的とする政党は腐敗する」と社会党も非難する。現代にも通じる論理である。

(徳田八郎衛)



■郷里について書かれた本

西ヶ谷恭弘・光武敏郎編

『城郭みどころ辞典・西国編』

東京堂出版 発行/定価2310円

お城紹介の本は紹介しきれないほど店頭に並んでいるが、これは日本城郭史学会代表を務め、各地の城跡発掘でも大活躍の西ヶ谷さんと、歴史作家で城郭にも詳しい光武さんが、朽木史郎さんなどの郷土史家の協力を得て編集した本だから、限られたスペースに貴重な情報が満載されている。

逆光になるのを心配して「撮影には午前中が可」と痒いところまで手が届く。評者が車で通過中に何度も立ち寄った園部城も福知山城も、本書を読んでから教えられたことが多い。

本書は三重県から沖繩県まで八十三の城を紹介するが、兵庫県では尼

崎、三田、篠山、出石、姫路、明石、龍野、赤穂、洲本の九城と柏原陣屋、即ち一〇箇所が記載されている。

高根県は松江、浜田、津和野の三件、沖繩県などは首里城だけである。

これは竹田城跡、富田城跡、今帰仁城跡などの「城跡」は取り上げず、今も「城郭」が存在する城を優先したからであろう。ぜひ、次は、黒井城跡や八上城跡などの城跡にも挑戦で頂きたいものである。

もつとも、この選択には理解できないところもある。尼崎城などは城跡すらなく、本丸跡に立つ場内小学校校舎や校庭に再現された城の大型模型が写真で登場する。採用されな



かった但馬の竹田城跡などの「ズルイヤ」という声が聞こえてくるようだ。そして竹田市の岡城や淀城、安土城などは石垣と石段しか残っていないが採用されている。

あの姫路城や彦根城と対等に柏原陣屋が並んでいるのは、地元民として誇らしいやら恥ずかしいやらであるが、著者は由緒正しく「栢原陣屋」と記している。そして次のように記述する。

「陣屋は延世初頭には栢原城であった。慶長三年織田信長の弟信包が四万四千石の豊臣大名として築城した。この城についての詳細は残念ながら不明である。(中略) 信勝除封のち栢原領は天領に組み込まれ、おそらくこの時点で城は取り壊されたのであろう」

この城が後の陣屋と同じ場所だったのか、入船山の中腹といった戦国的な雰囲気のある場所なのか、郷土史家の研究を待ちたい。(徳田八郎衛)

■郷里について書かれた本

中尾 巖著

『丹心花影』(たんしんかえい)

丹波新聞社印刷／定価1500円

眼前の恐龍、下崖に然たり

奔騰すれば、残紅 碧天に舞う
 大学時代からの無二の親友の友愛
 を祝すかのような天の計らいか。世
 界一の恐龍という。期待は大きい。
 (丹波逍遙6「丹波龍」より)

東洋美術史家・元大手前大学参与
 で丹波市文化協議会副会長として活
 躍された、青垣町佐治の中尾巖先生
 の著書。その特長は、

一、「丹波八景」他丹波・篠山の自
 然・名所・歴史・文化・人物につ
 いて九八篇を満載。

二、日本・中国の文人墨客、画家を
 興味深く紹介(五八篇)。

三、丹波龍、柏高百十周年記念、春
 日和田山道路など新しい動きも記
 載。

四、ユーモア溢れる漢詩、短歌とコ
 ミック調の解説がわかりやすいと
 好評。

五、丹波をイメージしたやさしい絵
 本調の表紙(村上祐喜子先生のデ
 ザイン)など。

著者は、この一年パーキンソン病
 を患い入院中のところ、そのリハビリ
 をかねて、子弟で書家の足立青宙
 氏との会話を病床で原稿にし、青宙
 氏が編集・出版された。さながら新
 たな丹波史を読むようでもある。

漢詩や短歌というと、今時の若い
 世代には敬遠され気味だが、読むう
 ちに引き込まれてゆくのは、筆者の
 語りの巧みさ、教養の豊かさから醸
 し出される気品であろうか。

当初は、二人だけの交換日記のつ
 もりが、あまりに多彩でおもしろい
 ので多くの人々に見て頂こうという、

ことになったらしい。三十年に及ぶ
 師弟の情愛の深さから偶然に生まれ
 た一冊といえようか。

そういうえば、丹波龍の発見も大学
 時代の無二の親友の久々の出会い、
 しかも丹波での再会から始まった。

天の計らいは、このような淡い素直
 な友愛に寄せられ、そんな風土が丹
 波であるのかも知れません。著者
 は、「平仄の不備もあり格に入らな
 いものもあり、書きたい気持ち先
 走りして……」と謙遜されています
 が、丹波への愛情に溢れる本書を、
 丹波ご出身の多くの方々に是非とも
 お手にとっていただきたくご案内申
 し上げます。(足立又男)

◇ 本書はA5判241頁、定価1500円(税込)。購読お申込みは足立又男(関西丹波市郷友会会員/FAX・TEL079517213091)まで。

◆芦田重秋さん

「山ざる」表紙、なかなか暖かくいいと思います、他方常岡兄のご回復をお祈りするや切という気持ちです。

(平18・11・1)

◆足立和巳さん

これから入会される若い方がたのため、名称を「関東丹波市郷友会」と変更してはいかがですか。

(平18・10・29)

◆足立真一・松子さん

実家の母の同級生のかたのお元気で幸せなご様子を、今回も嬉しく拝読させていただきました。「山ざる」を楽しく読ませていただいております。我が家の父はもうすぐ百二歳です。日々を大切に暮らしております。

(平18・10・28)

◆足立正範さん

ご案内ありがとうございます。一月

より諏訪市に引越しました。〒39

210027 諏訪市湖岸通1-12-1

2 (平18・11・6)

◆荒木輝雄さん

昨年から「ふるさと会」に参加させていただき、できる限り参加できるようがんばります。よろしくお願いいたします。

(平18・10・30)

◆池上忠志さん

年金生活を満喫しております。十年前に発症した心筋梗塞の通院、今も続けており、山に登れず酒が飲めないのが少々不満ではありますが。

(平18・11・10)

◆岩槻邦男さん

原則、木・金は三田の「ひとと自然の博物館」にあります。機会を見て訪ねてみてください。 (平18・10・29)

◆植田憲雄さん

昨年は辻丹波市長を同伴し、すばら

しい会にさせていただきました感謝感激で一杯です。本年は前日に篠山鳳鳴高校の百

三十周年記念式典などもあり、翌日も行事があり残念ながら欠礼します。

(平18・11・1)

◆浮田信子さん

四国霊場八十八ヶ所めぐりにでかけますので、会へは出席できません。元気で、このような計画や旅行を楽しむ生活を致してしております。

(平18・11・7)

◆大野善三さん

私は七十五歳の現在も元気です。今年四月、同期の同窓会を開きました。来年も行う予定です。(平18・10・30)

◆岡山 充さん

親兄弟がいなくなると、ふるさと丹波もだんだん遠くなります。

(平18・11・2)

◆岡 吉明さん

氷上ゴルフ协会会员勧誘のほうもよろしくお願ひします。(平18・10・31)

◆小田富士夫さん

小田富士夫、体調をくずして入退院をくりかえしております。小田明子、順番制の町内会の役員になり、会には出られません。来年の会には皆様にお目にかかれるのを楽しみにしています。(平18・11・3)

◆桂 照子さん

秋らしい青空の下、昔の運動会を思い出しております。本年も益々盛況でありますよう。皆様のご健康をお祈り申し上げます。(平18・11・1)

◆久保義広さん

(吹田市へ) 転居しました。長い間「山ざる」をお送りいただきありがとうございます。うございました。(平18・12・18)

◆小谷 崇さん

「田舎」の代名詞だった「丹波」や「篠山」が市になり、世の中は変わるものだなあと感じます。それも大いに結構なことと思いますが、東京のような、人々の間の格差の大きい所にならないように声援を送りたいと思います。(平18・11・2)

◆児玉安正さん

「山ざる」第37号ご送付いただきありがとうございます。ごとうございます。「丹波を撮る」は素晴らしい企画ですね。(平18・11・4)

◆酒井重男さん

平成十八年十月二十三日より一週間、セルビアへ英国の欧州復興開発銀行のプロジェクトで、技術指導に行つて参りました。セルビアは元ユーゴスラビアのひとつの国で、イタリア半島に近く、治安は安定し、のんびりした国です。(平18・11・4)

◆笹倉強・郁子さん

十一月十九日は主宰する合唱団の第一回演奏会(日大カザルスホール)のため欠席します。ご来席の諸兄姉のご健康を祈念いたします。(平18・11・16)



◆笹倉靖幸さん

今年こそ参加したいと思っておりますが、当日は日本におらず、残念です。
(平18・11・2)

◆田中洋行さん

柏陵東京支部総会お世話になりました。十一月十七日柏高百十周年記念ゴルフ実行委員会。十一月十九日篠山鳳鳴高校百十周年祝賀会出席のため欠席いたします。十九年四月二十八日柏高百十周年祝賀会へのご出席をお願いしておいてください。(平18・11・4)

◆薫川てる代さん

皆様方の丹精こもりし「山ざる」を長い間お送り頂きありがとうございます。遠くふる里(丹波竹田)を偲びながら、とっても楽しく読ませていただいておりますが、わたくしも老齢に達し、会費もおこたりがちで、めいわくをかけておりますので、本年限りで「山ざる」も止めていただき、お別

れさせて頂きたく思います。長い間ほんとうにありがとうございました。

私ども柏女のクラス会はまだ柏原であり出席しています。八十四・八十五の老人でも十人ほど集まり、女学生時代にかえっています。最後の年会費を少しですがお送りしました。

(平18・11・23)

◆常岡幹彦さん

目下、明春早々開催の丹波での個展制作に全力を傾けています。深く掘り進みたいと思っております。

(平18・11・2)

◆出町京子さん

関東と丹波との二重生活も十八年続き忙しく過ごしております。門弟たちがお年寄りの集まりに招かれ、日舞のプレゼントで大変好評を頂き、わたくしも大きな喜びです。(平18・11・4)

◆田 敏夫さん

毎日元気で歩行を六十分行い、体力維持に努力しています。平成元年、観光事業功労者として表彰された。

(平18・10・30)

◆田 晴通さん

関西丹波市郷友会の世話役余田氏死去のため、会報の発行が今後できなくなり、さみしいかぎりです。

(平18・11・3)

◆野村節三さん

相変わらず三陸で定年生活を送っております。現在の仕事は、市委託の「海・河川域の水質調査」や地元中学校の評議員などです。

(平18・11・11)

◆藤田千治さん

おかげさまで元気に過ごしております。今年は古稀を迎えることができました。

(平18・10・30)

◆堀井隆川さん

檀信徒の篤い御法愛とご支援をいただき、本年一月末に寺域の霊園造成地に、おかげさまで新本堂・客殿・庫裏が完成致しました。来年五月十六日

(水曜日・友引)に晴れて落慶法要を執行する準備を致しております。二十一世紀は心の時代とも叫ばれている現実を看過することなく、教化育成と教線拡張のため、力を注いでいきたいと思っております。
(平18・11・1)

◆前田和秀さん

今年二月末を以って五十一年間勤めた医療より離れ、生きがい大学の学生として、地域の方々や周辺の皆様方との交流を密にして、勉強させて頂いています。
(平18・10・30)

◆山口和久さん

家族みんな元気にやっています。来年はまた息子藤吉郎秀吉に私たちの二人目の孫が生まれます。詳細は丹波新

聞ホームページのリンク先「山ちゃん」の「5963」に出ていますから見てくださいね。
(平18・10・30)

◆山口敏之さん

丹波を出て三十年以上になりますが、望郷の念は強まる一方です。年に数回は帰省するようにしており、自分の根っこを確認をし、また頑張ろうとリセットする旅にしております。
(平18・11・13)

◆山口泰男さん

月日の経つのは早いもので、仙台に来て四十年になります。四年前に定年になりましたが、まだ大学に出入りして、ボランティアのようなことをやっております。
(平18・11・22)

◆山本述子さん

丹波市に変わってもやはり「関東氷上郷友会」。嬉しいですね。故郷へのアクセスは便利になりましたが、だか

らと違って頻繁に通えるというわけでもなし、「山ざる」を一挙に読ませていただき、懐かしみ、励まされています。
(平18・10・30)

◆若森敏郎さん

十月六日、お蔭様で傘寿を迎えました。昨年暮れに茨城県技師会で共同執筆した「省エネルギー・リサイクルによる経費削減手ほどき帖」も好評なようです。
(平18・10・25)

◆訃報

平成18年9月1日から19年8月31日までの間に事務局に届いた訃報です。心よりお悔やみ申し上げます。
矢持 直也殿
畑 義則殿 平成18年8月11日



公演

●西崎 祥舞踊公演

西崎 祥（出町京子）さんは7月8日、丹波市の丹波の森公苑ホールで舞踊生活60年を記念する「西崎祥舞踊公演」を開きました。門弟約30名も出演して13の演目を繰り上げました。会主の西崎さんは長唄「四季の山姥」と同「二人椀久」に出演、60年かけて磨いた日本舞踊の真髄を披露して満場の観客を魅了しました。

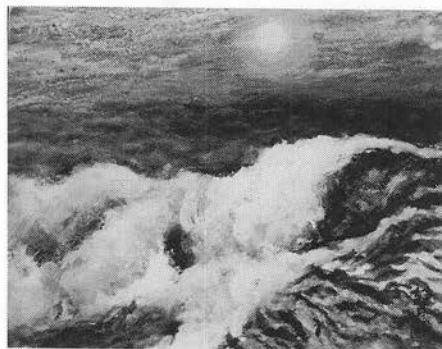


長唄「二人椀久」

展覧会

●常岡幹彦日本画展

玄'07常岡幹彦日本画展は去る2月16日（金）18日（日）まで丹波新聞社3階フロアで開かれました。会場には「月と舞う」「北濤」「月響」など大作12点のほか屏風からSMまで30余点が出展され、気迫に満ちた画風に圧倒されながら観客は見入っていました。



濤（丹後・10号）

同窓会

●平成19年度柏陵同窓会

東京支部総会開く

平成19年6月3日（日）千代田区の九段会館にて開催されました。

創立百十周年を迎えた今年の母校は、春先から学校及び同窓会本部挙げて様々な記念行事や事業も展開されて、これを節目とする一層の発展が期待されています。

そのような年の東京支部も、担当幹事役の13回卒業の皆さんの努力で、いくつもの新機軸を出して大いに盛り上がった集いとなりました。

懇親会のスタイルも、従来の立食から全員席指定で疲れない着席制とし、またパソコンを駆使したビジュアルな報告や講演なども好評だったと思います。

恒例のセミナーは13回卒の明治鍼灸大学看護学部教授の小山敦代さんの



「看護のあれこれ」の演題で、看護と看護教育の道40年の体験から、我々誰しも避けて通れない

好評だった着席制の懇親会風景

介護問題にも及んだ老いと健康など、貴重なお話を頂きました。

当日のご来賓には、母校の吉田校長、同窓会からは田中会長と石川副会長・県議及び阪神支部稲継支部長、県東京事務所の藤森次長・黒崎課長をお迎えし、このところ最も多い総勢97名の盛会で、西山酒造様からご提供賜った銘酒を皆で存分に味あわせて頂きました。

なお、東京支部では創立記念事業の一つとして、阪神・京滋支部とともに、母校の音楽部念願の楽器を寄贈しましたが、そのための基金のご協賛に応じて頂いた支部会員の多くの皆様に厚くお礼を申し上げます。

来年の総会は6月29日(日)に予定されています。より多くの皆様のご参加を楽しみにしています。

*同窓会東京支部のホームページ(下記)は、閲覧数が程なく1000になります。是非ご覧下さい。(支部長・高見)

<http://max.hi-ho.ne.jp/hakuryo-ts/>

同好会

●氷上ゴルフ同好会
記録続出、新会員も好調

ハニカミ王子こと石川遼君や宮里藍など若い選手が台頭してきて日本のゴルフ界も盛り上がりを見せ、氷上ゴルフ同好会も新会員の方が増え、なかなかどうして昔の王子たちがこの一年、熱戦を繰り広げてきました。なかでも104回阿見ゴルフクラブでの金出さん(春日町出身)のグロス78という記録と、新会員の直田さん(山南町出身)のハーフ37の記録は傑出しております。金出さんは次の105回には、ハーフ35を出されてあっさり記録を塗り替えられました。これらに引張られるように全体的にも80台の記録が続出してありますが、記録はともかく同郷のお仲間とその知己たちとのゴルフを通しての集いはたいへん楽しく、3か月ごとがとても待ち遠し



く感じられます。この一年の成績は次の通りですが、詳しくは下記のホームページをご覧ください。

○104回(阿見ゴルフクラブ/平成18年9月7日)

- 1位 金出 一郎(78)
- 2位 細見 次郎(88)
- 3位 上野 忠明(93)

○105回(清川カントリークラブ/平成18年12月7日)

- 1位 藤田 純(90)
- 2位 岡林 逸男(89)
- 3位 水船 隆昌(96)

○106回(季美の森ゴルフ倶楽部/平成19年3月8日)

- 1位 直田 正(84)
- 2位 近藤 仁司(94)
- 3位 藤田 純(88)

○107回(江戸崎カントリー倶楽部/平成19年6月7日)

- 1位 前田 軍治(89)
- 2位 谷垣 悦夫(89)
- 3位 細見 次郎(81)

<http://www.pcc-taiyo.co.jp>

ご案内

●東京兵庫県人会総会交流会

兵庫県出身者の集まりである東京兵庫県人会の年一回の総会交流会が左記の日程で行われます。今年は5年に一回廻ってくる丹波地区の当番で、今話題の丹波恐竜化石発見者の村上茂氏の講演があるほか、交流会では篠山「鼓篠組」の太鼓の演奏・豪華な福引抽選会も予定されております。

◇日時 平成19年11月7日(水)

17時～18時20分

◇会場 明治記念館(港区元赤坂2-

2-23) ☎03-3403-

1171(代)

◇参加費 7000円(前払い振込が

原則)

会員でなくとも参加できますので、希望者は県人会・幹事の谷口浩章(柏陵15回生、☎03-3257-1961、e-Mail: h.taniguchi@mx4.ttcn.ne.jp)までご連絡ください。

丹波市の人口急減、計
画の七万人を割る

丹波市の人口は平成一七年一月一日の国勢調査では、七〇、八一〇人であったが、平成一八年一〇月一日では六九、九七〇人と、一年間で八一六人減少した。丹波市が総合計画に示した「七〇、〇〇〇人」を割ったことになる。過去の四年間の減少の年平均は五五七人だが、この一年の減少幅は一・五倍となった。減少人口の約三割に当たる転出の理由について、分析資料とするため転出者を対象にアンケート調査を実施することとなった。

市は、特に生産年齢人口の減少に歯止めをかけ、また、若者の転入をうながす住みよいライフスタイルを提案していきたいと、人口維持に向けた「定住戦略プログラム」の

策定を検討している。

(平18・12・21付)

ゴミ処理施設の建設地
決定、隣接地が反対

丹波市は、市の一般廃棄物処理施設の建設予定地を自治会に公募したところ、四自治会から応募があったが、そのうちの「春日町野上野」を建設地とすることを正式決定した。しかし、隣接する春日町国領区では自治会が反対運動を展開していて、「申請しようとする自治会が隣接自治会に声をかけるルールを無視したこと、市は積極的に話し合いを指導しなかった」と市議会に不満をぶつけている。

市と、野上野区、国領区の三者協議は物別れに終わり、建設予定地の近くには、「断固反対」の看板が立てられた。

(平19・9・9付)

柏原高校の創立一一〇
周年を祝う式典

四月二六日、全校生徒八一三人のほか県、学校関係者、歴代校長ら来賓約七〇名が出席し、一一〇周年を祝った。式の運営は生徒たちが担当した。節目の年を祝い、さらなる発展を誓って校歌が高らかに歌い上げられ、式場を響き渡った。

吉田和志校長は「我々教職員は、未来の創造に向けて力を合わせます。過去数々のドラマを見てきた校庭のヒノキは、さらに枝を広げ、今後新たな歴史の証人となるでしょう」と祝辞を述べた。

(平19・5・1付)

丹波市の「住みよさ」
前年より下がる

東洋経済新報社の二〇〇六年度版によると、丹波市は全国七八〇の市のうち四七〇位にランク付けされた。前年の四一九位から下がった。なお、篠山市は二九九位で、前年の三八四位から上がった。

住みよさの評価点は、「安心」「利便」「快適」「富裕」「住居」の五観点。このうち丹波市の全国順位が高いのは、一世帯当たりの延べ面積で三〇位、ゴミ排出量(一日一人)が三二位、持ち家世帯比率六〇位など。反対に低いのは、一人当たりの都市公園面積の七四八位、人口密度の六三二位など。



猿

友

会

井田悦子
喜田綾子
長尾貴美代

大石佐代子
小糸イキ
安原三智子

小田明子
笹倉郁子
塩見みつえ

可部美智子
篠原よね子
渡邊貴美子

岸本昌子
千葉淳子



- ① NPO法人アジアの新しい風・理事・事務局長
<http://www.npo-asia.org>
- ② 丹波新聞 嘱託記者「丹波人NOW」のコラムニスト
<http://tanba.jp>

上 高 子 (氷上町出身)

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-18-22-414
TEL/FAX 03-5426-6714
e-mail ue-takako@c07.itscom.net

- ① アジアの大学で日本語を学ぶ学生たちを支援するNPOを立ち上げました。草の根の相互理解を目指しています。アジアとの融和に関心のある方、ご支援ください。
- ② 丹波人に掲載すべき人材を求めています。お心当たりのある方、是非ご連絡ください。



エクステリア専門商社

株式会社 トコナメエプコス

会 長 松 下 文 雄 (柏原町)

代表取締役 広 瀬 寿 和 (山南町)

〒160-0003 東京都新宿区本塩町23 第2田中ビル
TEL 03-3354-0211 FAX 03-3354-7767

人と技術で社会に貢献する

株式会社 ユー・ティー・ケー

代表取締役
会 長

水 船 隆 昌

本 社：〒102-0081 東京都千代田区四番町六番地 パレプランビル5F
Tel 03 (3556) 4070 Fax 03 (3556) 9577

東海営業所：〒319-1111 茨城県那珂郡東海村舟石川764-10 東成ビル2F
Tel 029 (283) 0460 Fax 029 (283) 0469

業 務 内 容：・原子力関連事業 ・人材派遣事業
 ・節水工事業 ・食品等の卸及び販売

コンピュータ・データ処理 ー少量でもお任せくださいー

株式会社 サイモン・デジタル・センター

仕事内容：入力代行（名刺、ハガキ、アンケート、エクセルシート ほか）
出 力（宛名ラベル、直接印字、帳票出力 ほか）
そ の 他 データ管理・メンテナンス・事務局代行

専務取締役 塚 口 智（氷上町油利）

営業部長 藤 田 徹（市島町今中）

〒103-0014 中央区日本橋蛸殻町1-14-10
アナリティカビル5F
TEL 03-5659-3081

◆本誌発行にご協力有難うございました

春日大路の山里
春花・夏花の香りいっぱい。
美味しい山里の花蜜が採れています。



健康食品

御贈答に！産地直送！！

プロポリス (丹波春日産)

樹木の若芽が出て蜜蜂が一生懸命働いてプロポリスを集めました。ストレス解消・健康管理に大好評！



プロポリス

代表 山内秀樹 (柏高 第11回生)



やまひで猪肉店 養蜂部

丹波市春日町栢野1064 TEL.0795-75-1773 FAX.0795-75-0958

パークイン
Park Inn
by KAIBARA

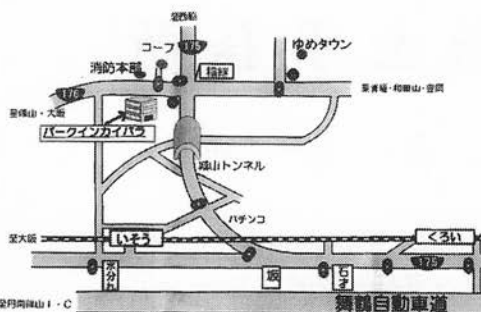
(株)柏原ビジネスホテル

TEL. 0795-72-3525

FAX. 0795-72-3495

〒669-3311 兵庫県氷上郡柏原町母坪380

ご宴会・帰省の際のご宿泊に



- ・会議室、宴会場完備
- ・駐車場 (50台、大型バス駐車可)

JR福知山線柏原駅よりタクシー5分
近畿自動車舞鶴道春日インター7分

●お食事は

蔵出し料理 **あじくら**

TEL. 0795-72-3715

調布市文化会館たづくり内
アカデミー愛とぴあ
文芸誌「たきおん」同人

木 村 つ た 江

〒182-0005 東京都調布市東つつじヶ丘 2-39-5
電話 03-3300-6895

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます。

電気主任技術者第一種免状	第2-319号
技術士（電気部門）登録証	第15810号
エネルギー管理士（電気）免状	第 2857号
エネルギー管理士（熱）免状	第 5191号

若 森 技 術 士 事 務 所

所 長 若 森 敏 郎

〒302-0023 茨城県取手市白山 5-4-13
TEL・FAX 0297-72-0907

◆本誌発行にご協力有難うございました

都市から丹波地方にIターンした人たちを紹介!!

丹波で暮らそう—納得ガイド



田舎は最高

平野隆彰+荻野祐一 共著 1,300円

なぜ丹波で田舎暮らしなのか

その答えが詰まっています

丹波新聞社発行

申し込みは当社へ

〒669-3309 兵庫県丹波市柏原町柏原201

TEL.0795-72-0530 FAX.0795-72-1956

<http://tanba.jp>

団塊世代が田舎暮らしを始める問題のすべてを網羅した完全マニュアル。
丹波地方の魅力を最大限に引き出すためのヒントが満載。Iターン者だけでなく、田舎暮らしに興味のある都市住民にも必読の書。
高野生

さすが
&
されど

60歳からの知恵と体験交流誌

隔月刊誌 [さすが&されど] 好評発売中

本誌は読者投稿を主体に編集するユニークな雑誌です
/日々の暮らしから世直しまで知恵と体験を交流し合
います/年間購読料 3,700円 (税・送料込み) 下記へ。

時代と共にあなたの歴史

自分史年表

一家に一冊/書く・読む・調べる記入式
歴史年表/定価 1,800円 (税・送込み)

これから書きつぐ生活ノート

メモリー50

1年2ページ、50年間書ける気軽な
メモ帳/定価 1,800円 (税・送込み)

記念の年に贈る同時代シリーズ▶ [昭和10年生まれ] (昭和8・16年生れは売切れしました。)
既刊▶ [昭和4・5・6・7・9年/昭和13・14・15・17年] ■各巻3500円

株式会社 **ホンゴ出版**

代表取締役 池田 忍

〒247-0005 横浜市栄区桂町 1-1-1

☎045 (895) 2712/FAX 045 (895) 4338

Eメール: hongo@mocha.ocn.ne.jp

あだち眼科院長 / 医学博士
順天堂大学眼科 非常勤講師

足立和孝

〒 347 - 0015
加須市南大桑字下鳩山一六二〇一
TEL 〇四八〇一六五一一五九八八
FAX 〇四八〇一六五一一六〇九七
E-mail: kazu358@pastel.ocn.ne.jp

東京都渋谷区日中友好協会理事
日産労連・エルダークラブ幹事
広範な国民連合・東京世話人
E M ネット 埼京理事

足立和巳

〒 183 - 0051
東京都府中市栄町一―一五―二七
TEL・FAX 〇四二―一三六四―七二二七

足立かをる

株式会社 ナレッジリンク
足立国際会計事務所

足立知佳子

代表取締役
税理士・米国公認会計士 (Certificate)
〒 152 - 0035
東京都目黒区自由が丘一―二―三四 藤タワービル六〇二
TEL 〇三―三七―八一八〇四七 FAX 〇三―三七―八一八一四七
E-mail: cadachi@ata.gr.jp

足立静雄

飯田光雄

〒 285 - 0045
千葉県佐倉市白銀三―一八―十一
電話 〇四三―四八五―〇五〇三
FAX 〇四三―四八五―〇二九一

明治四年創業・伝統銘茶

株式会社 明日香園

代表取締役 池畑 廣士郎

本社 東京都豊島区南池袋二丁目二六―五

電話 〇三―三九八〇―三七四一

生田 清弘

東京都世田谷区成城一丁目七―七
電話 〇三―三四一五―一八九三

井本 義一

上野 重喜

〒234―0054

横浜市港南区港南台三丁目七―二二
TEL・FAX 〇四五―八三二―七三三二

有限会社 PCC大洋

岡 吉明

〒351―0014

朝霞市膝折町三丁目七―五
TEL 〇四八―四六〇―一六〇一
FAX 〇四八―四六〇―一三九七
<http://www.pcc-taiyo.co.jp>

岡林 逸男

〒177―0051 東京都練馬区関町北二丁目七―一七

小田 富士夫

梶原 やす子 清

木呂子 恵美子

久保 春雄

株式会社 アイ・ケイ・アイ
株式会社 ホームワールド
代表取締役 岸 田 勇

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町三丁目一〇
電話 〇三-三二四九-五二六一

〒300-0031 土浦市東崎町十三丁目一六〇四
電話 〇二九八-二二-二九七八

栗田 功

仲 山 坂

口 上

一 泰

聰 男 登
仙台市在住

坂

上

勝

朗

坂

上

明

高

見

嘉

都
司

〒 173 - 0025
東京都板橋区熊野町四〇番十一号
電話 〇三 - 三九五六一〇六〇〇

合唱指揮者

笹

倉

強

〒 352 - 0014
新座市栄四一五 - 二五
TEL・FAX 〇四八 - 四七七 - 五六四〇

坂

上

豊

高見秀史

柏陵同窓会東京支部の
ホームページがスタートしています。
<http://max.hi-home.jp/hakuryo-ts/>

谷口浩章

株式会社 シードコーポレーション

代表取締役 千種倫幸

東京都中央区銀座一丁目二一ー九
電話 〇三ー三五六七ー九七〇〇

日本画家

常岡幹彦

〒357-0205 飯能市白子一七三ー七
電話 〇四二ー九七八ー二〇九八

鶴田宏

日本舞踊

西崎 祥
端唄 根岸 妙

〒224-0027 横浜市都筑区大圃町五〇〇ー一八
電話 〇四五ー五九一ー六六五五

青葉山 真照寺
八王子 青葉靈苑
(都営八王子霊園隣り
第二期墓地分譲案内中)

住職 堀井隆川

〒193-0821 東京都八王子市川町四九三一二
電話〇四二一六五二二〇一一

村上末吉

村上久夫

〒168-0072 東京都杉並区高井戸東三十四一十二
電話〇三十三三三三二一七一三四

山口和久

恵理子・藤吉郎秀吉・由佳・愛莉
賢一・寧々・愛々・茶々・凧人・思温

〒196-0031 東京都昭島市福島町二一〇一二七
電話〇四二一五四四一八八六一
http://plaza.rakuten.co.jp/yamaguchi_0330/

PHP文化フォーラム 植生の宿
代表 吉住自由造

〒216-0033 川崎市宮前区宮崎五―五―三五
電話〇四四一八六六一三六二一

渡邊隆男

集	記
編	後

★東京に住んでふる里を想えば、かつて自分が日常を過ごした風景か浮かぶ。しかし、かれこれ二十年近く丹波（旧柏原町）と東京を往き来して感じるのは、ふる里は生き物「新陳代謝」は着々と進行していることだ。山谷は変わらぬが、河川は出水の度に改修が行われ、流れは様変わりしている。

建物では、旧柏原町役場の隣接地にあった郡民会館が取り壊された。その昔、高校の授業で能を鑑賞したことがあった。その会場となった当時の郡民会館は、藩政時代の遺構で和風庭園の中に建物があり、中は広々とした畳敷だった。「鶴姫御殿」と言われていたと古老から聞いた。由緒あるものだったが、老朽化によりその後取り壊され、郡民会館は平凡な鉄筋コンクリート造に変わった。それが今また古くなり取り壊されたのだ。旧女学校の趣きのある校舎は、長らく大手会館として使われてきたが、これも老朽化によ

り取り壊されるようだ。

表通りから入った住宅街では、古くなった空き家が散在していたが、このところそれらは次々取り壊され、跡には全国版の住宅が建つ。賃貸用なのか数戸の連棟式で駐車場付きも多い。住まう人はどんな人達だろう……。

さて「山ざる」の編集メンバーにも新風が吹き込まれつつある。私も長らく仲間に入れてもらってきたが、退け時であると考えている。会議に出てふる里の便り等いろいろ聞くのは楽しいことだった。「山ざる」誌は関東水上新友会の心であり絆だと思ふ。会員として「水上郡」に対する愛着と誇りを今後とも持ち続けたい。

（鶴田）

★郷里の柏陵同窓会に出席しても同期の9回生にはさっぱり出会えませんが、少年時代と同様に先輩方が可愛がってくださいます。そして自分の村を案内してくれます。その成果は毎年の本誌で「丹波を撮る」にも反映してきました。改めて

御礼申し上げ、創立一一〇周年を迎えた母校の御名を称える次第です。（徳田）

★「ふるさとトピックス（丹波新聞）」から「」を担当して、丹波の地域医療の崩壊寸前をリポートした。暗いニュースばかり。最後の原稿を送った翌日に届いた丹波新聞の一面には、柏原病院小児科に「神大病院から非常勤医」という見出し。少し明るいニュースがあった。（上）

山ざる 第38号

平成十九年十一月一日発行

足立静雄 池田 忍 井徳正吾
上 高子 上田正文 岡 吉明
木呂子恵美子 坂上勝朗 常岡幹彦
鶴田ゆき子 徳田八郎衛 原谷洋美
藤原ひさ子 本城英明

発行者 関東水上新友会会長 渡邊 隆男

〒174-0064 東京都板橋区中台3-1-27 11-401

坂上勝朗方・関東水上新友会事務局

☎〇三（三九三二）二四〇一

振替〇〇一〇一三二二二三三〇

製 株式会社二五社

編集協力 株式会社ホンゴ出版

人材募集!!

関東地区、関西地区

(1) 倉庫管理者 (2) 大型、中型トラック乗務員

※年齢を問わず活躍して下さる方を求めます。

当社は三井化学(株)、大日本印刷(株)、アサヒビール(株)、ダイキン工業(株)、沖電気工業(株)、三菱商事(株)などを主力荷主に持つ総合物流会社です。東京、名古屋、大阪に主要倉庫を持ち、関東・関西圏の物流をつなぎます。



日本で一番大きなトレーラーが毎日、東海道を走っています。



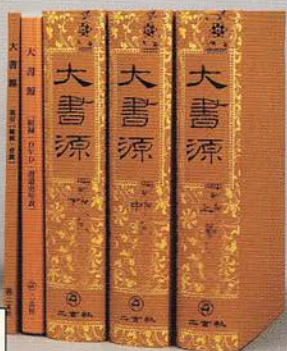
物流センター：敷地7000坪、建物3000坪

三協運輸 株式会社

代表取締役社長 岸本 勲 (氷上町出身)

本 社	東京都足立区保木間 1-1-3	TEL.03 (3860) 8112
大阪支店	大阪府大東市新田中町 3-3	TEL.072 (806) 2821
埼玉支店	埼玉県桶川市加納峯 3-7-9	TEL.048 (728) 9380

物流倉庫所在地 東京 埼玉 神奈川 名古屋 大阪



附録DVD: コンピュータ上で全頁閲覧可能!

B5判変型 (260×190mm)・上製布貼表紙・函入・総3056頁

通常価格: 50,400円 (税込)

郷友会々員特別価格: **40,320円** (税込)

●書体字典の最高峰。未曾有の二十一万字収録!

大書源

二玄社創立五十周年記念出版

全三巻十索引冊

[附録DVD・書道史年表]

漢字の姿は、一つではありません。
三千年の歴史の中で、数多くのスタイルが生まれました。

●魚の例……



甲骨文



金文



石鼓文



説文篆文



居延漢簡



張遷碑



吳讓之

魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚

鍾繇

顏真卿

歐陽詢

米芾

空海

王羲之

小野道風

殷の甲骨・金文から清末の斉白石まで、あらゆる時代の様々な書体を取
集し、二十一万を超える史上最多の字例を収載しました。二玄社の半世
紀に亘る出版活動で蓄えた膨大な資料を基礎に作り上げた、書体字典の
決定版です。

*詳細カタログをご請求ください。



二玄社

会長 渡邊隆男